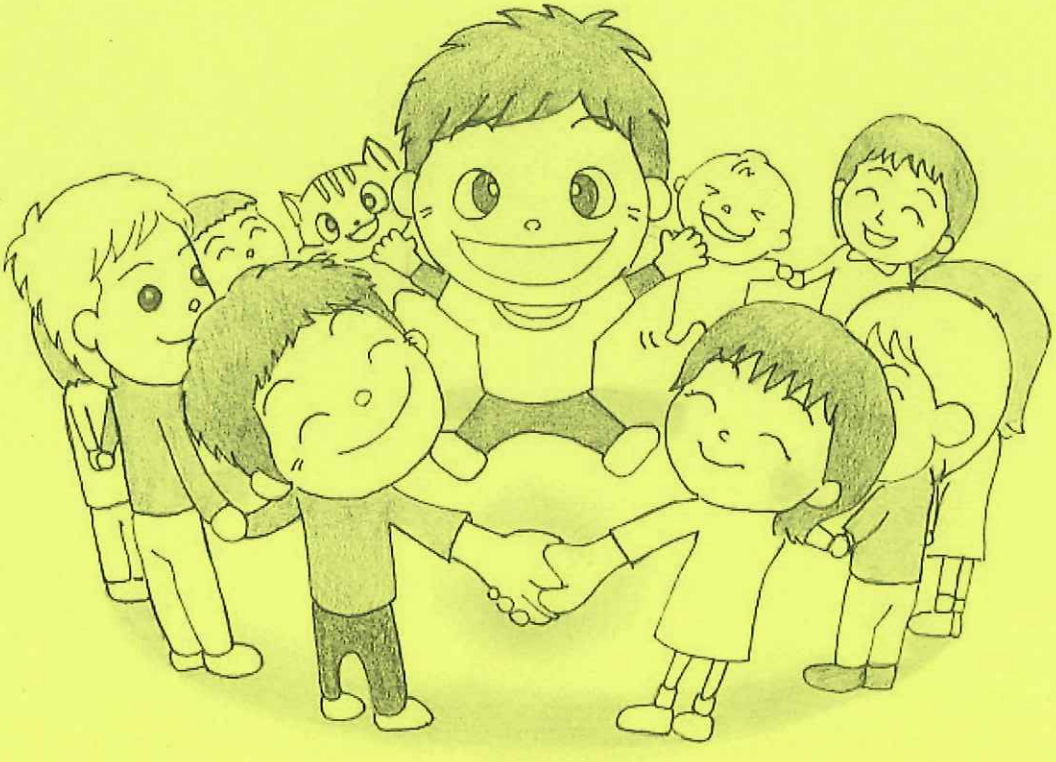
第9回　全国児童館・児童クラブ岩手大会

子どもに関わるオトナはみんな集まれ!

～みんなでつなぐ、しなやかで丈夫なネットワークをつくろう～

報告書



主催●全国児童厚生員研究協議会、岩手県社会福祉協議会児童館部会

岩手県立児童館いわて子どもの森、財団法人 児童健全育成推進財団

共催●岩手県、盛岡市

目　次

全体日程 …… 1
開会式 …… 2
＊開会宣言　全国児童厚生員研究協議会
＊実行委員長あいさつ　第９回全国児童館・児童クラブ岩手大会 実行委員長 吉成 信夫
＊主催者あいさつ　財団法人　児童健全育成推進財団　常務理事　鈴木　一光
＊ご来賓あいさつ　厚生労働省雇用均等・児童家庭局　育成環境課長　真野　寛
岩手県知事　達増　拓也
盛岡市長　谷藤　裕明
オープニングパフォーマンス / 歓迎パフォーマンス …… 7
トークセッション …… 9
現場からのメッセージ（1）埼玉大学・国士舘大学　講師　森本　扶 …… 17
（2）京都府京都市　ももやま児童館　館長　波多野　里美 …… 19
（3）岩手県矢巾町　煙山児童館　主任児童厚生員　細川　由子 …… 21
分科会報告
第１分科会　「児童館・放課後児童クラブスタッフの情報交換」 …… 24
第２分科会　「子どもの姿になにをキャッチ！？　その心に寄り添える大人に」 …… 27
第３分科会　「中高生の居場所はどこに？！　児童館（地域）の可能性を探る」 …… 30
第４分科会　「発達障がいについて、聞こう、学ぼう、感じよう！」 …… 33
第５分科会　「あそびで発見！子どもの力・あそびで発信！児童館・児童クラブの魅力」 …… 36
第６分科会　「気づこう！子どもの思い、語り合おう！私たちにできること」 …… 39
第７分科会　「地域で育てる大きな未来」 …… 42
第８分科会　「ここがツボ！児童館マネジメントを良くする方法を求めて」 …… 45
第９分科会　「子どもの安全・安心とリスクマネジメント」 …… 48
あそびにコンビニ …… 51
交流会 …… 53
あそびのレシピ集＆レシピ展示 …… 54
閉会式 / エンディング …… 55
＊閉会あいさつ　第９回全国児童館・児童クラブ岩手大会 実行委員長 吉成　信夫
＊次期開催　滋賀県へ引き継ぎセレモニー　あいさつ
第 10 回全国児童館・児童クラブびわ湖大会 実行委員長 吉村　潤子
参加者の声 …… 57
あんなこと こんなこと …… 58
ブログ・新聞記事等 …… 59
大会スタッフ …… 61
大会開催要項 …… 62
おしらせ
協賛企業

全体日程

【大会１日目】１０月１７日（土）

時　間	内　　容
11:30～12:45	受　付
12:45～13:15	【開会式】
13:15～13:45	【オープニングパフォーマンス】　～宮澤賢治の世界～
13:45～16:05	【トークセッション】 子どもに関わる施設は変わる！ 児童館・児童クラブは変えられる！ ～地域のコア施設としての新たな役割とは～
16:05～16:20	～　休　憩　～
16:20～16:30	【歓迎パフォーマンス】　～遠野の民話～
16:35～17:30	【現場からのメッセージ】
17:30～17:35	【事務連絡】
17:35～	～　移　動　～　　（※全国児童厚生員研究協議会　総会）
18:30～20:30	【交流会】

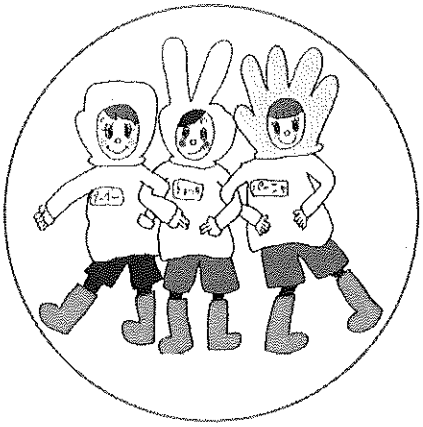
【大会２日目】１０月１８日（日）

9:00～ 9:30	受　付
9:30～12:00	【分科会】
12:00～12:15	～　移　動　～
12:15～	【閉会式】

●あそびにコンビニ
- 大会１日目/17日（土）　１０：３０～１４：００
- 盛岡駅前広場「滝の広場」にて

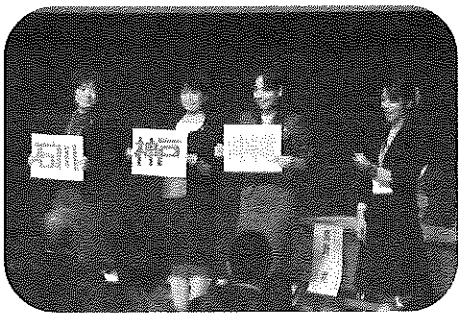
●「あそびのレシピ（工作・行事）」の展示
- 大会期間中
- アイーナ５階　アイーナギャラリー(展示室)にて

●県内の福祉施設のご協力による「セルプフェア」
- 大会１日目/17日（土）　１１：３０～１６：３０
- アイーナ７階　会議室 701 にて



開会宣言

全国児童厚生員研究協議会　役員一同



私たちはこれまで全国大会のたすきを大切につないできた仲間です。第１回の東京大会から始まり、京都、愛媛、広島、石川、ふたたび東京、神戸、沖縄、そして第９回の岩手！
これから第９回全国児童館・児童クラブ岩手大会を始めます。

実行委員長あいさつ

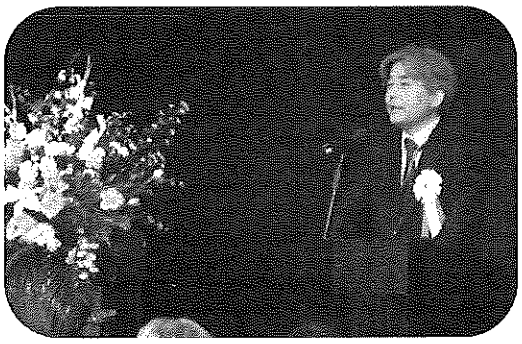
第９回全国児童館・児童クラブ岩手大会　実行委員長　　吉 成　信 夫
（岩手県社会福祉協議会児童館部会部会長　岩手県立児童館いわて子どもの森館長）

こんにちは。

沖縄で第８回の全国大会が開催されてから２年が経ちました。私も含め本県の関係者数人と初めて参加させていただきましたが、本当に驚きました。沖縄が「お祭りの島」というのは聞いていましたが、皆さんエイサーを踊られて、明るくて楽しくてエネルギーがあって、交流の場として最高の場所でした。でも私をはじめ岩手の人間は、同じようにエネルギーを出すことができなかった。エイサーを踊り出した瞬間に、私たちは壁に後ずさってしまいました。私たちにはできない、と。でも夜の懇親会の時に実行委員の皆さんとお話をし、初めてお会いした方々なのに、「吉成さん、２年後私たち盛岡（岩手）に行くからね。明日から岩手に行く貯金を始めるからね！」とその場で言ってくれました。そしてその想いを受けて今日がある、と。私は本当に感謝しております。

前回の沖縄大会の最後に、次回開催地として２つのことを申しました。１つは岩手県は宮澤賢治さんを生んだ場所であり、しかも盛岡も非常に関わりが深いところ。賢治さんが子どもたちに残したメッセージを児童館・放課後児童クラブ、そして子どもの放課後に関わる皆さんとともに、ちゃんとメッセージを受けられるような、そういう大会を作りたいんです、と全く独断でしてしまいました。でも今日そういう形でこのあとのオープニングを迎えることができますので、お楽しみにして下さい。

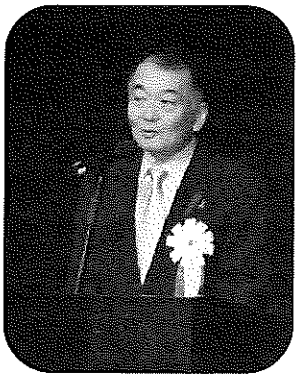
もう１つは、今回のテーマに『子どもに関わるオトナはみんな集まれ！』とつけさせていただいております。つまり、児童館・放課後児童クラブの将来を考えるときに、もう自分たちだけで内側に閉じこもってやっていてはダメ。これから先の放課後の子どもたちを支える場所としての児童館・放課後児童クラブというのはどんな形になっていったらいいのか、どんな機能を持てばいいのかということを、皆さんと一緒に本音で語り合って、元気になってみんなで帰りたいと思っております。



２日間という時間は短いようで長いですので、いろんな形での出会いや集中した考えの掘り下げになると思います。皆さんと一緒にこの２日間のプロセスを楽しみながら、いい大会にしたいと思います。どうぞ、よろしくお願い致します。

主催者あいさつ

財団法人　児童健全育成推進財団　常務理事　　鈴 木　一 光



６０年前に児童福祉法が制定された時、私たちの先輩は「子どもは歴史の希望」と、エレン・ケイの言葉を借りて児童福祉法を作ったそうです。泣きわめく自分の子どもを叱りながら当時３８歳の厚生省の課長が児童福祉法をしたためた。食うに食えない時代に子どものために児童館を作らなければいけないという熱い想いで作ってきて今日に至っています。私もこの仕事に就いて児童福祉法と同じくらいの歳になりますが、児童館というものが今一つ元気がない。子どものことは全部学校で済むのではないか？　色々な活動がたくさんあれば、なにも児童館にお金をかけなくてもいいのではないか？遊んでいてどんな人物になるのか、勉強するから偉くなるんだ。こういう言葉に児童館は反論してこなかった。説明責任を果たしてこなかった。２０年ほど前、東京の児童厚生員の数人が５００円を持って、その忸怩（じくじ）たる思いで、東京都児童会館の４階に集まりました。研修会でもない、自分たちだけの内にこもった会でもない、子どもの遊びを通して健全育成していく課題をどうやって世間に訴えるか。それで、ひそかに手弁当で、公からの支援をもらわずに、自分たちだけのために集まろうということで、元気がなくなっている仲間にも声をかけ、それが５０人、１００人、１５０人となりました。そんなことやって何になるんだ、という仲間の反発もありました。それで初めて１８年ほど前、東京から全国に発信して集まったのがこの会です。当初、手弁当で集まるので、児童厚生員は安い給料で志だけでやっている人たちが多いから、1年に1回ずつは無理だろう。2年に1回にしよう。そして、北の都に今回初めてやって来ました。これだけの人が集まってこれだけ歓迎をされて、色々な方に話を聞いてもらえるという場があり、大変うれしく、今までの苦労が嘘のように思えてきております。

つい（１０月）１３日に社会保障審議会があり、すべての子どもの健全育成、すべての子どもの支援ということで児童館側から意見を求められました。私がその時考えたことは、子どもが社会に出てきちんと税金を払える立派な大人になるためには、社会化されなければならない。社会化されるために必要なのは、「家庭」、「仲間」、「学校」。この３つがきちんとそろって始めて子どもが世間に出ていける。この時に家庭が今、親が忙しく教育力を失い、家庭で子どもをしっかりと支えられる状況が全国的に少なくなってきた。学校は？　学校の使命というのは国民の教育力を上げることと同時に、選別の機能をもっている。人格は点数に還元されませんので、選別機能で成績向上になってしまった。その結果、学校でゆったりと仲間と語らって、仲間同士のやりとりの中から人格が磨かれる、我慢をする、泣く、友だちのために役に立つという体験が大変少なってきた。この学校で友だちができなくなった、地域は親が忙しくなって近隣が消えた、隣近所の米や惣菜の貸し借りから子どもの預け預かり、こういった関係も消えて地域社会は形骸化してきた。その中で隣近所の友だちも子どもにはなくなってしまった。

この３つを地域を核にして子どもの遊びをきちんと獲得できるのは児童館しかないんです。学校にもその機能はない。その児童館のあり方をきちんとみんなで検証して、楽しい中に地域の方を巻き込んで親御さんの子育て支援をきちんとして、児童館がこれから進んでいこう。そういう時代になって

きた。こういうふうに私は考えています。

それを一人ひとりの現場の職員がプライドをもって、説明力をもって、いろいろな方々の協力を仰いでやっていきましょう、というのがこの大会です。

いま政治も混沌として、どうなるか分かりにくい状況もあります。今までやってきたものが予算削減される可能性も‥‥。しかし私たちは、どうなるだろうかではなくて、子どものためにどうしたいか！　これをきちんと考えて発信していく会にしたいと思います。２日間交流を深めて楽しみながら学びたいと思いますし、この会を支援してくださった知事、市長をはじめ、多くの岩手県の同志に心からお礼を言いたいと思います。楽しく２日間やっていきましょう。

ご来賓あいさつ

厚生労働省雇用均等・児童家庭局　育成環境課長　　真 野　寛

本日は児童館・児童クラブの関係者をはじめとして、全国より７００人以上の方が大会にお集まりいただいていると聞いております。誠にありがとうございます。皆様方におかれましては日頃から、児童の健全育成、子育ての支援にご理解ご協力をいただきまして、この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。

本大会で行政からの説明の機会がないとのことですので、最近の国の動きについて事務的な話になりますが、お話をしたいと思います。

ご案内のとおり政権が変わりまして、一昨日１０月１５日に来年度の概算要求の出し直しをしました。本日の朝日新聞の一面でも事項要求が２兆円を超えているという話がありましたが、皆さま方の児童館・児童クラブ関係の補助金、施設運営費等もすべて事項要求になっております。今回、児童手当を廃止して、子ども手当てを創設するということで、その財源は全額国庫負担で要求していますが、児童手当は国庫と地方、事業主からの拠出金が財源となっておりまして、皆さま方の児童館等の補助金は１００％事業主の拠出金が財源となっております。児童手当が廃止となりますとこの拠出金も廃止されることになり、子ども手当の財源のあり方を含め、今後検討しなければならなくなるということで、今、事項要求となっています。

基本的に政府は子育て支援に前向きでございますので、皆さま方への活動への助成が後退することのないように我々も努力して参ります。

放課後子どもプランを進めております。新待機児童ゼロ作戦に基づき、１０年計画で放課後児童クラブを拡充していくということで進めてきたわけですが、民主党のマニフェストにもありますように、保育所の待機児童の解消を前倒しして進め、その中に、放課後児童クラブの予算も大幅に拡充して、事項要求としているものでございます。放課後児童クラブで７１人以上及び２５０日未満の開設のクラブの補助金については、３年前に廃止をすると明示をしたわけですが、現段階では廃止が決定されたのではなく、今年の暮れまでの検討課題となっております。

それから、改要求ではないのですが、夏の段階で新規要求を１つしました。それは、現在の子どもたちの育ちの現状を見てみますと、少子化や核家族化、地域の結びつきの希薄化などで社会生活の変

化によりまして、子どもたちの多様な体験活動の減少や、異年齢集団での遊びの機会の減少などがみられます。子ども本来の育ちであります遊びを通した健全育成というものが十分達成されていない現状がございまして、「地域で作る子どもたちの健全育成」という事業を要求致しました。児童館が中心となって、総合的な指導者として、いろんな人材を集めて実行委員会を作っていただいて、小学校区程度の規模を想定していますが、その中の施設やあらゆる機関と連携して地域全体のいろんな世代を対象に、さまざまな事業を展開していく。そういうことで、子どもたちの健全な育成を進める事業を予算要求しております。まだ事項要求の中に入っておりまして、暮れに予算が成立した際には、ぜひ手を挙げていただきたいと思います。これからの児童館のあり方、方向性をみつけるためのパイロット事業ということで考えております。

次に、次世代育成推進法の行動計画でございますが、前期が本年度で終了し来年度から後期の５年間がスタートするわけでございますけれども、自治体におかれましては、子育て支援や放課後児童の健全育成の施策として、児童館・児童クラブが行動計画の中でどのように位置づけられ、実行されていくのか、というのが非常に大切なことでございます。できれば、積極的に行政に働きをかけて、計画策定に関わっていただきたいと思っております。

いずれに致しましても、児童館・児童クラブは地域における子どもたちの放課後の育ちを支え、心身ともに健康で、豊かな人間性を培う重要な拠点であります。ぜひ、地域で認められる児童館・児童クラブになるためにこれからも頑張っていただきたいと思います。

最後になりますが、本大会の開催にあたりまして２年間にわたり準備に進めて下さいました実行委員のみなさま、ボランティアや関係団体、そして岩手県、盛岡市の皆さま方のご尽力に深く感謝を致しますとともに、熱く御礼を申し上げます。この大会の２日間が皆さまにとりまして、有意義なお時間となりますよう、また皆さまのご健勝を心より祈念致しましてご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

ご来賓あいさつ

岩手県知事　　達増　拓也

本日は全国各地において、児童の健全育成や保護者への支援等にご尽力しておられます指導員の皆さまをはじめ、ご参会に皆様には自然豊かで人情あふれるここ岩手の地にようこそお越し下さいました。県民を代表致しまして、心から歓迎申し上げます。

近年、核家族化や少子高齢化が進行し、家庭や地域における子どもの養育機能の低下が指摘されておりますが、児童館・放課後児童クラブは母親クラブ、地域ボランティアなどと連携をとりながら、子育てに不安を抱える保護者への支援を行い、また子どもの発達に応じた多様な健全育成活動を提供する地域の子育て支援拠点として、その役割がますます重要になっています。

国では、平成１９年に策定した放課後児童クラブガイドラインに基づいて、総合的な放課後児童対策を推進していますが、本県におきましても、現在希望あふれる岩手の姿を県民と描き、「いっしょに育む『希望郷いわて』」を基本目標とする新しい長期計画の策定を進めているところであります。この

計画では、県民一人ひとりが希望に向かって生き生きと働き、ふるさと岩手で安心して暮らしていける社会を実現していくために安全・安心な暮らしの確保、地域コミュニティーの維持・再生、未来を担う子どもたちをはじめとした人材の育成などを重要な課題と捉え、仕事と子育ての両立支援のための放課後児童クラブの拡充や多様な地域子育て支援活動の充実に、なお一層取り組んでいくこととしています。

こうした中、全国の児童厚生員・放課後児童クラブ及び児童健全育成関係者が一堂に会し、児童館等の果たすべき役割・方向性について研究協議されますことは誠に意義深いものと存じます。宮澤賢治が理想郷イーハトーブとして想いを重ねたこの岩手において開催されます本大会が、次代を担う子どもたちが健やかに育ち育てられる環境づくりの推進に大きな成果を挙げられることをご期待申し上げます。

おわりに、大会の開催にご尽力された第９回全国児童館・児童クラブ岩手大会の実行委員会の皆様方に深く感謝を申し上げますとともに、ご参会の方々のますますのご活躍を祈念し、お祝いの言葉と致します。おめでとうございます。

ご来賓あいさつ

盛岡市長　　谷藤　裕明

本日ここに第９回全国児童館・児童クラブ岩手大会が、全国各地から多数の皆様方にご参加をいただき、盛大に開催されますことをお祝い申し上げますとともに、３０万市民を代表いたしまして心から歓迎を申し上げます。

全国児童厚生員研究協議会、財団法人 児童健全育成推進財団の皆様をはじめ、日ごろから地域の児童健全育成事業に携わっている行政、児童館、児童クラブの職員、母親クラブなどの関係者の皆様がそれぞれの地域で子育てを支援し、児童の健全育成にご尽力いただいておりますことに敬意を表しますとともに、深く感謝申し上げる次第でございます。

さて、近年、児童を取り巻く環境は、少子化や核家族化の進行、女性の社会進出の増加、就労形態の多様化などを背景に大きく変化しており、次代を担う子どもたちが健やかに育ち、また、放課後等に安全に過ごすための環境づくりが求められております。本市におきましても、『人々が集まり、人にやさしい、世界に通ずる元気なまち盛岡』をまちづくりの基本に、各種施策を推進しているところであり、特にも安心して子どもを産み、育てることができる環境づくりや、子育て支援体制の確立を重要な柱の一つと位置付け、事業を推進しているところでございます。

この度、児童健全育成事業に携わる児童福祉関係者が一堂に会し、専門的知識や技術の向上を図るこの大会が、実り多いものとなりますようご期待申し上げますとともに、本日ご参会の皆様が健康で、なお一層、福祉向上のためご活躍されますようお祈り申し上げまして、お祝いと歓迎の言葉とさせていただきます。

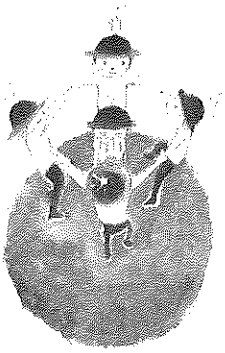
本日は誠におめでとうございます。

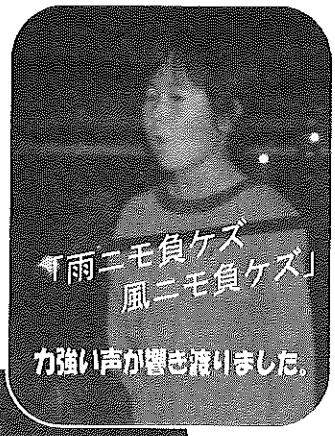
オープニングパフォーマンス
～宮澤賢治の世界～

●出　演　者●

朗　　読：竹　下　景　子　さん(俳優)
朗　　読：大　柏　一　花　さん(小学３年生、盛岡市立仁王児童センター)
バイオリン：宮　澤　香　帆　さん(花巻市立花巻中学校３年生)
ピ　ア　ノ：宮　澤　やよい　さん
映像協力：細　川　　剛　さん(写真家)

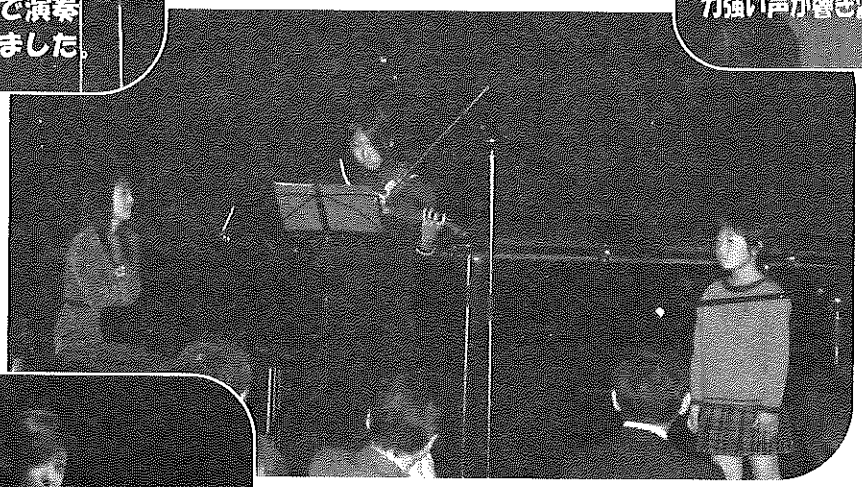
賢治さんご本人がお使いになっていたというヴァイオリンで演奏していただきました。





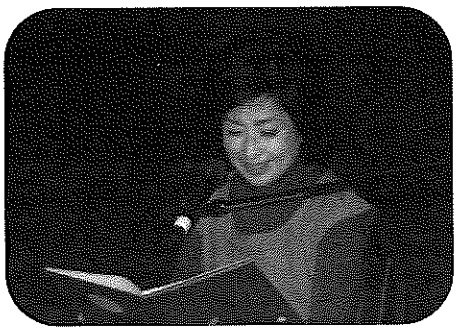
「雨ニモ負ケズ
風ニモ負ケズ」

力強い声が響き渡りました。



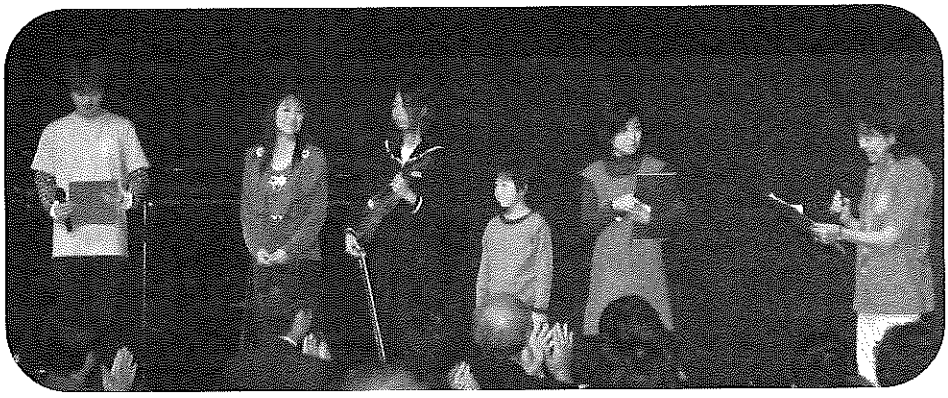
宮澤賢治の作品を４つ、
朗読して下さいました。

会場のだれもが、この世界に
すぅ～と、引き込まれました。



背景のスクリーンには、
写真家細川さんの作品が
映し出されました。

出演者のみなさんに
インタビュー！！
司会者の２人も
ドキドキです❤



歓迎パフォーマンス

～遠野の民話～

●出演者●

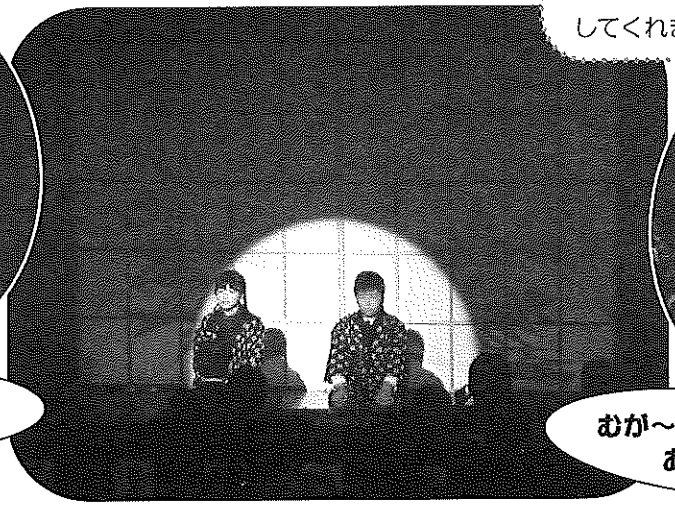
菊池　真永 さん（小学６年生、遠野市綾織児童館）

菊池　大成 くん（小学６年生、遠野市綾織児童館）

天狗や河童、座敷わらしなど遠野に伝わる不思議な話、おもしろい話がまとめられている「遠野物語」。子どもたちが華麗なリズムで披露してくれました！

きいてがんしゃぇ！

どんど　はれ！



むが～す、
あったずもな！

トークセッション

子どもに関わる施設は変わる！児童館・児童クラブは変えられる！
～地域のコア施設としての新たな役割とは～

パネリスト ★竹下　景子 さん（俳　優）
★天野　秀昭 さん（(特活) 日本冒険遊び場づくり協会　副代表）
★寺田　陽子 さん（(財) 札幌市青少年女性活動協会こども事業部長）
★奥山千鶴子 さん（(特活) びーのびーの　理事長）
★大村　千恵 さん（奥州市水沢青少年育成市民会議　主任事務局員）
コーディネーター★吉成　信夫　（岩手県立児童館いわて子どもの森　館長）

吉成　いきなりですが、竹下さん、（オープニングに出演されて）いかがでしたか？

竹下　背景に映し出された細川さんの写真は、足元の小さな世界から広い宇宙を感じる作品まであって、とても美しかったです。“場の空気”が変わりましたね。賢治の世界がこの場で育まれて、ずっと今も受け継がれている。それはここにしかないものなので、是非これからも大事に守り育てていくのが大人の務めでもあるし、子どもに託したいものでもありますよね。

吉成　そうですね、先程（オープニング）の余韻がまだ会場に漂っていますね。岩手を含む東北の人たちの内に秘めた情熱を感じる、深い写真でしたね。

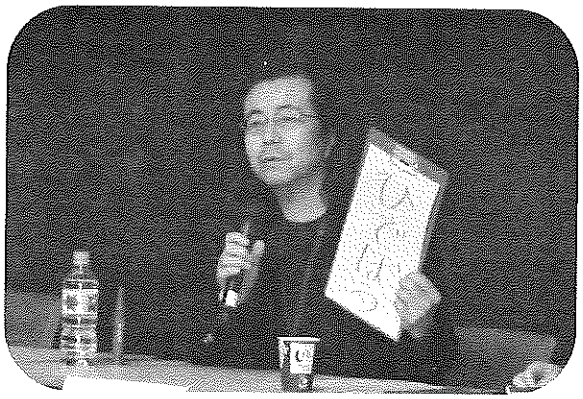
竹下　賢治のあの磨かれた言葉一つ一つも、目で読んでいる時と声に出してその言葉をもう一度自分で入れ直した時に感じるものってありますよね。あのリズム感もこの土地が持っている独特のリズムなのでは。

吉成　ありがとうございます。

今日はせっかく竹下景子さんがいらっしゃいますので、まずは昔私が欠かさず見ていた『クイズダービー』を！　実は、県内でワークショップをやる時にも勝手にやらせてもらっているもので‥‥。皆さんにお題を出しますので、一問一答ピピッと来た言葉を書いてもらいたいと思います。まずは、子どもの頃のあだ名は？

竹下　「ももたろう」と呼ばれていました。中学高校時代、３つ編みをしていて顔も真ん丸。日本昔ばなしの“ももたろう”のようだった。それで演劇部の仲間たちに“もも”と呼ばれていました。

天野　「ひでぼう」。名前がひであきだったので、親戚にはこう呼ばれていた。友だち同士では名字で呼び合うのがほとんど。初めてニックネームが付いたのが、大学生の時で「ハゲ坊」（笑）



寺田　旧姓が高木だったため「ブーさん」だった。同じく荒井さんは「チュー子」と。ドリフ世代なんです。

奥山　「あちゃこ」。旧姓が浅水だったため。

吉成　元気な子のイメージですね。

大村　私は単純に名前で「ちーちゃん」。今のほうが子どもたちに「魔女っこちーちゃん」と呼ばれています。子どもたちからすると、私は得体の知れない、変な生き物なんだそうです。

吉成　ですよね‥‥。あっ、失礼しました。

では、第２問。子どもの頃、ほっとできたくつろげた場所は？

寺田　ちょっと格好よく、○○大学！　実は実家が大学の隣だったので、そこが私の遊び場でした。裏から入って隠れて空き地でソフトボールをして遊んでいた。守衛さんともぐるになって（笑）

奥山　干してある布団の中。布団にくるまったりこたつに入ったりして遊んでいました。太陽の匂いがいっぱいなのが好きでしたね。

大村　もみ殻でできた布団の上。小学校低学年の時、学校に行きたくなくて、友だちの家のもみ殻の布団の上で寝てさぼっていたのを、ふと思い出しました。

天野　下町だったので家々が密集。その家と家のすき間、そこを駆け抜けるのが好きだった。あまりに狭すぎて大人は追いかけて来られない、だからよく逃げ道に使っていました。

竹下　小さい頃は団地住まいでした。団地の階段で、ぼーっとしているのが好きでしたね。今でもそこで台本を覚えたりすることも。隅が落ち着きますね。

吉成　僕は草むらの土管の中でした。少年サンデーを読み、そこでちびっこコーラを飲んでいる時が一番幸せだった。子どもの頃はみんなで遊んでいながらも、1人になる時間もちゃんとあって、それが幸せでしたね。

吉成　（ここから本題）今日は皆さんが体験してきたことをベースにお話をしていただきたいと思います。初めはそれぞれに活動報告をしてもらおうと思いましたが、そうではなく、今までどう生きてきたのか？　なぜ今こういう仕事をしているのか？　そういうところを含めて、長めの自己紹介をしていただいてから、本題に入りたいと思います。それでは天野さんから。

天野　なんか自分の歴史を語るなんて、最初の打ち合わせの中にはほとんどなくて‥‥それならば1時間半ほど欲しいものですね（笑）。

僕の最大の関心事は子どもが遊ぶということ、それでずっとやってきました。実際の活動は冒険遊び場“プレーパーク”で、いま３０周年を迎えた世田谷の羽根木プレーパークが日本で一番初めの常設のプレーパークというわけですが、そこの最初の常駐プレーリーダーが僕です。そのあと世田谷区内に４つのプレーパークを作るのを地域の住民と共に一緒にやってきました。また、日本冒険遊び場づくり協会を立ち上げ全国の冒険遊び場を支援することと、あとは有志で集まって「子どもの遊びに関わるオトナの役割とはなにか？」ということについて「プレイワーク」という言葉を使って、きちんと考えていこうという活動をしています。

あとは、竹下さんが実は世田谷の方で‥‥。

竹下　はい、羽根木プレーパークにはお世話になりました。２人の息子がいますが、子どもの誕生日といえばよく大勢のお友だちと遊びに行って、泥んこになって遊び、最後には外でケーキを食べて楽しんでいました。ここにはいろんなご家庭の方が集まってくるんですね。１つ覚えているのが高いおうちから飛び降りたりできるところがあって。あれは自然にそうなったんですか？　どなたかが考えたんですか？

天野　建物を建てる段階で子どもは屋根で遊ぶし、たぶん飛び降りるであろうというのは想定済みでした。

竹下　マットも何段もちゃんとあって‥‥。

天野　あれは、子どもたちが粗大ゴミ置き場から拾ってくるんです。

竹下　あら、そうなんですか？　で、うちの子が中学年くらいの時、我先に！と飛ぶ子が何人もいて、だけど１人飛べない子がいた。私が「それ、みんなも飛んでいるから頑張れー！」と応援していたら、近くにいたお母さんが「そういうことは強制してはいけません。子どもの意思を尊重すべきです。」と。そういうアドバイスを受けたりして、あ、そうか‥‥と勉強もしつつ、いい経験をさせていただきました。

天野　遊びのこと以外に、もう１つはチャイルドラインという子ども専用の電話（１８歳まで）をやっています。子ども専用の電話は日本にはなかったもので、最初保護者からは援助交際ではないかという誤解を受けたことも。そのチャイルドラインを立ち上げたメン

バーの１人でもあります。今、冒険遊び場とともにチャイルドラインも全国に広まりつつあります。

吉成　ありがとうございます。もう、いろいろ聞きたいことがありますよね。では、次に寺田さん。

寺田　私は「財団法人 札幌市青少年女性活動協会」に所属しておりますが、出発点は青少年、勤労青少年ホームでした。そのあと女性の施設に１０年程。それから異動になって今の児童館(札幌では児童会館と呼ぶ)にきました。現場にいたのはだいたい１０年ちょっと、その中で新しい会館を２館担当したり、老人福祉センターやまちづくりセンターと一緒の複合施設で楽しいことをしたり、その経験が今の自分にあるのかなと感じています。また、もともと学生時代には非行に走る子どもたちとか若年層の自殺がものすごく多い時代で、そういうことに関心があって、そういう施設に行きたかったという思いがありました。児童館にも同じように、ちょっとつまずいたけどまた頑張れるという子どもたちがいますよね。私はどちらかというとそういう子が好きで、わりと寄っていくんです。不登校で中学校にまるっきり行っていない子と関わり、その後の道筋がきちんとできて、今社会人になっている子とか、小学校になかなか行けない子に、学校と連携して学校の楽しさを分かってもらえたり。そういう活動をしてきました。

札幌の児童館のスタートは、皆さんとはちょっと違っていて社会教育施設です。今まさに第１号館（中島公園の中にある児童会館）が６０周年を迎えるところですが、最初のスタートは「戦後の混乱期の子どもたちの遊びを保障する」でした。今、その原点を忘れかけているのではないか。

さらには集団遊びということも、なんとなく人数が多くなり忘れられている。異年齢集団の関わりができる場所はなくなってきている。そういった状況の中、放課後の場所でやるしかないのに、それができていない。今までも児童館の対象は０～１８歳であったけれど、どちらかというと小学生主体であった。それが今、平成１８年から指定管理者制度がスタートし、札幌では午前中の０歳児からそして夜は中高生の夜間利用で１８歳までもれなく来るようになった。そして来年には札幌のある児童館１０４館全部で中高生の夜間利用をやる予定です。このように地域の中で０歳から１８歳まで集えるところはそんなにないと思う。そういう場所に児童館がなってきている。

あとは地域との関わりですね。待っているのではなく、自分たちから出かけよう！そして地域の中に何かあったら、私たちでよかったら協力するよ、ということを御用聞きのように言って歩こうと、いま私は動いています。

吉成　６０周年を迎えた中島児童会館がスタートしたのが昭和２４年。その時の内容を見ると、子ども相談室や陶芸の窯があったり、子どもの無線放送局まであったり‥‥。それが昭和２４年というのが僕はかなりびっくりしたんですが‥‥。その時代にそれだけの理想を掲げてやり始めたルーツがあるのはすごいですね。

寺田　そこが原点かなと思っています。今、子ども運営委員を作って運営の中に子どもたちの声をどんどん入れていこうという動きを作っています。

吉成　ある児童館で建てる時から子どもたちが入って、子どもたちが一緒に考えて、だから事務室が小さくなってしまったという話を聞いたことがありますが‥‥。

寺田　１番新しい１０４番目屯田北児童会館です。札幌の北にあるこの会館の愛称は「屯珍館（トンチンカン)」！　私もびっくりしましたが、子どもたちが選んだようです。響きなんでしょうね。

吉成　もうちょっと、ゆっくり聞きたいですね。やるじゃん、札幌という感じですね。では、大村さん。

大村　はじめにもお話したように、私はとても幸せな幼少時代を過ごしていました。しかし、中学校にあがるときに突然父親が家から出ていき、そこからうちの生活はどん底でした。知らないうちに財産がすべて打ち払われていて、明日のご飯をどうやって見繕うか大変な時期でした。４人兄弟と父の母（お姑）と母。私にできることは家の中を明るくすることだと思っていました。高校生になって、自分としては真っすぐに生きていたつもりでしたが、傍から見ればやっぱり片親だからあんな風になったんだよなと、なぜか言われるように。母はいつ寝たのかなと思うくらい一生懸命働いて、私たちの世話をしてくれました。自分が崩れそうになった時もあるけれど、そんな母の姿を見ていると、これ以上母を苦しめたくない、悲しませたくないと思いとどまれた。母が居たからこうして今の自分があると、ずっとそう思っています。

私も２人の息子に恵まれました。２５年前息子が中学生の時、学校が大変荒れていました。ＰＴＡで学校に行った時ツッパリたちが職員室で正座させられていたんですね。その子どもたちを見ていると、昔の自分が思い起こされて、この子たちにも必ず背景があって、好き好んでこうしているのではないと思いながら、眠れない日々が続きました。それで行動に起こそうと思い、その子たちと民宿に行ったり、温泉に行って１泊で麻雀旅行をしたり、稲刈りを手伝ってもらったりしました。関わってみると彼らはとても純粋。言えるのは、愛情に飢えているということ。こちらが真っすぐ向き合えば、必ず向こうも返してくれる。それがわかりました。彼らを民宿に連れて行く時、「一晩息子さんを預かります」とお願いして回りましたが、これでは普通に育つ方が難しいなと実感。家族にそれを求められないのなら、１人や２人子どもが増えてもいいと思えた。誰か１人でもその子のことを真剣に受け止めれば、その子は底まで落ちていかないという実感をその時にしまして、それがずっと続いて今があります。

吉成　大村さんは淡々と話していますが‥‥、実際に何人の中学生と出かけたんですか？

大村　子どもたち５、６人。ずっと別室登校していました。ツッパリの子たちなので校長先生には「おっかなくないですか？」と言われたけれど、私は怖くなかった。彼らの将来、このままいったら自分で自分の首を絞めているようなもの。学校にいる間に１つくらいいい思い出を作ってあげたい、ということを提案しに行きました。そして、民宿小旅行が実現したんです。

吉成　大人は？

大村　私と、なんとうちの主人が協力してくれました。息子たちは車に乗れないから留守番。息子たちにはちゃんと説明して出かけました。

吉成　そこからスタートしたんですね。ありがとうございました。続いて、奥山さん。

奥山　実は私の両親はともに岩手出身です。私も２歳まで岩手にいました。それから１８歳まで八戸に。その後、関東の大学に進学し、東京で就職、今は横浜で子育てをしています。東京で仕事をしている時は、家と会社、スーパーの往復という日々で近所づきあいが全くありませんでした。しかし、子どもが生まれてから変わりました。近所に知り合いがいない、子どもを育てていくのに親だけの力では到底無理だと。家庭の養育力、しつけの問題など厳しいまなざしもありますが、どうすればよいかわからない状況で孤立していた。公園といっても都会では子どもだけで遊びに行っておいで！と気軽に出せる所ではない。実際に２歳の息子と遊んでいたら、そこで痴漢が出たこともありました。子どもを近所に遊びに出せないこの世の中で、私たちは子どもの遊びをどう保障するのか、そういう話をしないといけないと思っています。

横浜には児童館が１館もありません。小さいお子さんをお持ちで地域から孤立している、転勤してきて地域のことがわからない、そんな親子のために商店街の空き店舗を借りて、乳幼児の親子の居場所を作りました。国もこういった事業を認めてくれて、７年経った今では全国１２００か所までになりました。今はまだ草の根の良さが残っていると思いますが、６０年続いてきた児童館、その児童館との連携が大事なことだと思いますので、今日は一緒に学びたいと思っています。

吉成　今まで話を聞いてきて、大村さんからも血はつながっていないけれど、家族団欒という場が大事だという話がありましたが、竹下さんいかがでしょうか？

竹下　私は、子どもたちには地域の中で育ってほしいという思いもあり、子どもと一緒に地域ぐるみのお付き合いもさせてもらいました。中には学校とうまくやっていけない、ご近所付き合いも子ども同士でうまくいかないというケースも時々見えてきました。その中で児童館は学校のようにはっきりとした役割がない分、逆に可能性が残されていますよね。そのためには熱意のある方々１人ひとりの努力に負うところが多いと思いますが、そういう方とめぐり逢えるか逢えないかが、子どもにとって今後をものすごく左右することになるんだろうなと感じました。保護者の立場として、専門家に任せるだけではなく、どういう形でお互いに連携をとっていくか、これからの課題かなと思いました。

吉成　今、子どもに起きている事について、世間で色々と言われていますが、天野さんが考えているのはどの辺りですか。子どもたちと長いこと付き合ってきて、いかがでしょうか？

天野　最近、子どもが遊べないという言い方をされますが、本当はどちらが問題でしょうか？　子どもの遊ぶ力がなくなったのか、遊ぶ力を奪う社会になったのか。捉え方で意味が全然違う。子どもは遊びたいのにその力を奪ったとなると、問題にしなければいけないのはそれを奪った環境の方です。遊び場の造りやそこに関わる大人、社会が子どもをどう扱っているかをきちんと見ないことには、子どもが元々持っている遊びの力を取り戻せるわけがない。いじくるのは子どもではない。プレーパークは環境をいじくってきた。

吉成　いじくってきたのは環境ということは、直裁的に言うと、いじくってきたのは大人ということもできますよね。天野さんの話にかなり共感します。子ども自身が変わったという論に関しては、子どもの環境が変わったという社会的背景を考えなければ、一方的には言えない、そう思います。大村さんも普段中高生と関わっていますが、どう思いますか？

大村　そうですね、同感ですね。札幌の実例を伺っていて似ていると思ったのが、私たちも１０年前に廃屋に近い施設を子どもたちと一緒に材料を選ぶところから始めて、手作りで彼らの城を作り上げていきました。まさに子どもの城、子どもの居場所を作ったんですが、中はできるだけ遊具を無くしたんです。子どもがガムテープでホームベースを作り、壊れた傘を拾ってきてバッドに、自分の靴下を丸めてボールにして、野球をしていたり。とにかくそこでは、遊びも人間関係も自分たちで創っていく。ノンプログラムですよね。

今、国が進めている小学校を拠点としたプランは大方プログラムありきで、子どもが考えたり仲間を作っていく力をもしかしたら削いでいるかもしれない。時には仕掛けも必要だけれど、彼らが大人になっていく上で避けて通れないケンカや奪い合いも他者との関係を学ぶ大切な体験ですし、あるがままの姿でいることによって、大人側はその子がどこに課題を抱えているかが見えてくる。そういう場所であることが大事だと思います。

吉成　児童館は遊びの提供を通して子どもに関わって

いくのが目的となっていますが、安全・安心についてどのようにお考えですか？　安全第一という囲い込みで本当に子どもは育つのでしょうか。安全というのは最低基準ではあるけれど、しかしそれは安心できる空間なのか。国も自治体も児童館も、これから先どういうふうに子どもに関わっていくのか、その辺りが出てくると思いますが‥‥。寺田さんは、どの辺りに問題や課題を感じていますか？

寺田　安全・安心が確保されていればそれだけでいいのかというと、そうではない。安全・安心は当たり前のことであり、それプラス目標がなければ、どうやって子どもたちを育てるのか。背景には、親からの苦情があると思います。最近はモンスターペアレント以上の親が出てきていて、ものすごいですね。(※事例省略)こういうことが起きると、現場の職員は萎縮してしまう。むちゃくちゃな遊びはさせられないという考えに。札幌は幸い組織が大きいので、現場が対応できない時は、きちんと後ろ立てがあるから大丈夫と伝えてきている。だから、最近では遊びに広がりが持てるようになってきています。

子どもたちに様々な体験をさせられるのが児童館。プログラムがないから。とにかく出かけて、いろんな所で普段関わることのできない大人と関わったり、いろんな体験ができれば、子どもにとってプラスになる。先程大村さんがおっしゃった中高生のノンプログラムもそういうものだと思います。今、中高生の夜間利用でも特にプログラムは作っていません。運動したい子は運動、音楽したい子は音楽、話したい子は話す。その中で何かやりたいという声が出てくる。それを職員がどうやってコーディネートするか、それが私たち職員の役割。これをしなさい、あれしなさい、これはだめ、あれはいいという判定員ではないはずです。

吉成　館の先生方にとっては後ろ支えがあるかどうかは大きいですよね。自分一人で背負っていて、その後ろが断崖絶壁となっていたら、踏み込むことができないですね。

天野　誰にとっての安全・安心なのかが問題。つまり大人が安心するやり方は、子どもも安心できることなのか？　子どもたちはリスク覚悟で自分の限界に挑戦する存在です。自分の限界を超えようとするのが子どもの遊びであり、それは危険を伴なうことであることを子どもは百も承知でやっている。ヨーロッパの冒険遊び場では、子どもの心を折るくらいだったら骨を折ったほうがマシだという考え方があるくらいです。

吉成　大人たちも危険度が高いと感じる時はとても気を張りますよね。そういう時は意外と事故は起らない。それよりも気を抜いたときが危ない。

奥山　先ほどの話で子どもは変わっていないという話がありましたが、子どもも大人も変わっていないと思います。私の両親も働いていて忙しかった。そういう状況だったけれど、子どもは子どもで育ち合ってきたし、近所の皆さんにも育ててもらってきた。大人が１００％向き合ってきたかというとそうではなかった。

現代の大人たちは子どもから目を離せない状態でいます。２４時間気を張っていないといけない。これはどんなに優れた母親だとしても大変なこと。養育力が落ちているとか色々言われるけれど、子どもと同じく親も力をつける機会が減ってきている。この環境、社会の中で子育てをする大変さを考えていかないと、単純に親批判はできないと思います。

子どもたちは公園など一歩外に出ると譲り合いや我慢が必要になり、遊具を思い通りに使えません。今まで自分の子どもしか見てきていない親たちがその時どう対応するのか。そこにスタッフがいる役割りがあると思います。いい経験ができたね、そういうスタンスで関わる。親自身もこういう経験を学ぶ機会がないと、モンスターペアレントになってしまうと思うのです。

竹下　子どもが小学生の時、「親児（おやじ）の会」というのがありました。普段できないことを子どもたちと一緒にやろうということで、夜中の１２時に学校の校庭に集まって多摩川まで歩いて夜明けを見たり、豚の丸焼きをしたこともありました。こういう時に、親同士の連携もできていくわけだし、そこから何かあった時にお互いさまという関係が生まれる。家庭同士で

なかなかうまく行かない時、誰が子どもを見守ってあげられるか。親同士で連帯感を持っていれば見守っていくことができるだろうし、都会も田舎関係なく、いろんな形で子どもたちを見守っていける。その１つが児童館でもあるし、そこに地域が関わっていけたら、なお良いと思いますね。

吉成　子ども自身が「集団遊び」に慣れていない。今の子は、缶けりや花いちもんめを知らない。やってみたらおもしろいし、やり始めたら止まらない。だけどそこには、その感覚を支えている大人が必ずいる。その大人は児童館の職員だけでは足りない。地域の方々に支えに入ってもらえる形に、もしくは自分たちから出かけていく形にして、地域支援または地域の中に混ざっていくという感覚を作っていかないと、モンスターペアレントの話も越えられないと思いますね。

児童館が還暦まで来ていますが、これまでやってこれたこと、やってこれなかったことを含め、この先を現場ではどう描いているか。寺田さん、お願いします。

寺田　１つは指導員の専門性を確保してきたか、社会的認知度を高めてきたかということ。例えば、教員は専門性のハードルをどんどんあげていますよね。それに比べて児童館の職員はどうか？　また予算削減の危惧感もあります。そういう状況の中で、私たちは児童館の必要性を市や国にきちんと訴えてきたか？　２つ目は地域との連携、まだまだ不足しています。地域にある素晴らしい方々の力をうまく取り込めているか。また、０～１８歳までと言いながら実際は平等ではなく小学生主体できている。どうやって利用者の偏りをなくし、みんなが集える場所にしていくか。児童館は地域の寄り合い所、コミュニティの場であっていいと思う。地域の支援者がどれだけふらっと立ち寄れる所にできるかが課題だと思っています。

先ほどのモンスターペアレントについて、私は親に向かって「子どもたちは遊んでいる以上怪我はあります。擦傷・切傷を含め、骨折くらいまではあります」とはっきり言っていいと思う。怪我のことだけではなくて、児童館ではこういう遊びを普段しているということも含めて話せば、納得してもらえるはず。現在は自損事故がもっとも多いなど。あらかじめ言っておくと実際に起きた時、親は納得してくれる。

地域の施設としてやるべきことはたくさんある。でも、やらなければいけないでは苦しい。職員には自らも楽しんでやろうと呼びかけています。子どもが好きだからやっているのではないか？　そうだとしたら、ぶれてはいけない軸は、子どもをどういうふうに育てるか、親とどうやって関わるか、地域をどう巻き込むか、この３点に尽きると思っています。

吉成　説明責任だけではつらい。それぞれの館が持っている、子どもをどう育てたいかという子ども観を含めて語りながら、親を納得させていかないといけない。寄り合い所とはいい言葉ですね。地域の中の“**総合的寄り合い所**”を児童館としては目指したいですね。

大村　私は子どもたちが社会に出た時にどう生きていけるか、いつも考えています。自立と共生が大切だと。「子どもと１０分間だけ遊んでください」と幼稚園児の保護者にお願いしたら、毎日遊べた家庭が１３％という驚くべきデータがありました。家庭でも学校でもない、第３の地域の居場所の意義は、不特定多数の人間が混ざり合うことにあります。子どもたちが素のままでいられて、自分で考え、他との関わりを覚え、他者を思いやる、その力を蓄えていってもらいたいですね。もう１つは、児童館は誰のもの？ということ。本来は０～１８歳までが利用できます。縦の年齢が繋ぎあって、お互いに育ち合い助け合う。その姿が全国の児童館、児童クラブで生まれたらいいな、と願います。

奥山　親になっている人たちの半数が、自分が親にな

るまで小さい子の世話をしてきたことがないというアンケート結果があります。親になったらお世話ができるというのが当たり前の時代ではない。

児童館に期待したいのは、中高生のうちから小さい子の面倒をみる経験をしてほしい。小さい子と関わる子どもたちを増やして、次の親を育てていくという循環を。そういう観点で児童館に期待しています。

天野　大人は教育ばかり大事にし、子どもの遊びに対する意識が低い。僕はこの３０年で確信しているが、生きる力は遊びの中にあって教育ではない。教育に対して遊育という言葉を使っている。教育は「教える育てる」、何を教えたいか育てたいか、大人側に意志のある言葉。逆に遊育は「遊ぶ育つ」、子どもは遊びながら自分で育つ力を持っています。

その子がやってみたいと感じるからその子の遊びになっていくわけで、その中で自分の能力をもっと高めていこうとしている。それは決して教育では実現できないこと。また、自分の限界を知るチャンスにもなり、これは自分の命を守る意味で大事。できなかったということ自体、ものすごく大切な経験。そういうことも含めて、子どもが自分がやりたいことに取り組むことで体感する、大人が教えようとしても教えられない世界。遊ぶということは、教育と同等にその子を育てる大きな力になっている。その価値を社会的に高めていく必要があると思います。子どもが遊ぶことにはかけがえのない価値がある、それをその立場にいる人間、まさに児童館の先生方が言っていかないとだめ。

吉成　今の話を聞いて皆さんに伝えたかったことが１つあります。それは、岩手の児童厚生員の先生が、お子さんを預けている親御さんから皮肉な言葉を言われたそうです。「子どもたちをただ遊ばせているだけでお金がもらえていいですね」と。ものすごく悔しかった。ここでは子どもがどんなに豊かな育ちをしているか‥‥と思ったけれど、その時は言葉が出なかった。それをどうやって説明するべきか、説明責任。そこから岩手の児童館の中でのハンドブックが誕生したんですね。

竹下　昔は自然に子どもが遊べたが、今はそのような環境ではない。子どもの遊びに真剣な大人がいるというのは頼もしいと同時に、切実な問題と再認識。地域、学校、家庭で連携して、１つの明かりが見えてくる気がする。これで解決とはいい難い。本当に届いて欲しい家庭にこの熱意が届いていないという悲しい現実も。それは行政のお仕事かもしれませんが、これから充実していかなければいけないことだと思います。

昔はままごとと言えば、誰もが母親役をやりたがったが、今はみんなペット役になりたいんだそうです。お母さんは大変な存在に見られているんですね。悲しいですね、みんなが生き生きできるように、こういった取り組みを皆さん頑張ってほしいと思います。

吉成　今日確認したことの１つは、遊びの価値を児童館職員はどうやって高めることができるか。もう１つは地域の中の総合的な寄り合い所であるということ。児童館は国を含めて行政に１つの機関として認められている存在です。その中でできることとして、遊びのこと、気になる子どもたちへの対応、虐待防止などいろんな問題がでてくると思う。時には自分たちで解決できないことも。その時にはいろんな専門機関とつながらないといけない。札幌はすでにやっていますね。児童館の先生は虐待予防協力員として研修を受け実施しているようです。奥山さんのように児童館はないけれど、子育て支援というところで児童館と一緒に関係していくところもある。また児童遊園も、例えばプレーリーダーが冒険あそび場に変えてしまうということも活性化の道では？　児童館が地域の１つのコア施設となれる可能性というものをこれから皆さんと一緒に話していきたいと思っています。

現場からのメッセージ＊1

森本　扶 さん（埼玉大学・国士舘大学　講師）
（財団法人 児童健全育成推進財団「児童館のあり方研究会」研究員）

児童館の源をたどる意味

私の専門は社会教育学であり、広く社会において行われる教育や学習活動を研究しています。特に、地域社会における子どもの発達に大変関心があり、中でも自分の研究対象は児童館です。研究の最初は、フィールドワークで子どもの遊びの支援および方法論という形で、児童館だけでなく先程話題にもあがりましたプレーパークも含めやってきましたが、今というものと向き合って調べていくうちに、だんだん後ろを振り返って歴史を吟味する、つまり児童館の源をたどる必要性を感じてきました。

昨今、非常に厳しい財政状況の中、児童館の機能の見直しを迫られ、再編を検討されている自治体が少なくなく、児童館の存在意義が見えにくくなってきています。極端な言い方かもしれませんが、単なる遊び場であれば、学校の余裕スペースでできるし、わざわざ職員を配置しなくても地域ボランティアや民間で、という議論も出てきています。そういう意味で、児童館は子どもの遊び場という役割を越えて、なんのための施設なのか。もう少し掘り下げるならば、施設があって、そこに職員が配置されて、地域を基盤としていて、すべての子どもを対象とする児童館の根拠は何かを、歴史的に検証する必要があると考えたわけです。

児童福祉法制定過程における児童厚生施設の理念

戦後直後の子どもを巡っては、戦災孤児や浮浪人の問題、少年非行、少年犯罪など非常にたくさんの問題がありました。また一方では、栄養不足などの問題も。そういうわけで当初は、基本的には保護が必要な児童に対する要保護児童対策であったわけです。しかし、応急処置にとどまらず、もっと根本的な問題解決を図ろうという気運の中で、おそらく児童福祉法は作られていった。そこで児童厚生施設というのは、法の積極的側面を担う象徴的存在として位置づけられたわけですね。法案の変遷を詳しくみていくと、そこには児童厚生施設という名称の前に児童文化施設や健康文化施設という言葉があります。児童文化施設の中身は、児童遊園地や児童図書館、児童劇場というような具体的な言葉も出てきます。この時点では、基本的には文化向上を目的として、芸術やアートという側面も踏まえて構想されていたようであります。それが最終的に児童厚生施設になっていくのですが、つまりもっと日常的な遊び場の要素も含め、すべての児童の福祉と文化の向上を目的とする施設というような意味合いで、児童厚生施設となっていくわけです。

児童厚生施設構想の内容

当時、立案に関わった厚生省の官僚が、立案後に児童厚生施設に対して振り返った文章があります。その中で彼は、子どもの成長の場として学校と家庭以外、つまり地域というのが重要であり、さらには児童厚生施設が文化の発信拠点になるのだ、と述べているんですね。しかし、これだけでは児童館の根拠が不明確です。要するに、社会が混乱しているから児童のために場を確保しようという意図は伝わりますが、職員を配置して地域を基盤にして何をどうするかという実践的意味合いが今一つ伝わってこない。そこに切り込んだ文章が、１９４８年「児童福祉」という解説書にありまして、コンセプトを私なりの言葉でまとめますと、「児童の生活の場を作る」という言葉に集約されます。なぜかというと、次の３つの要素が言われているからです。まず１つ目は、「地域における子ども集団の発生拠点になろう」。子どもの成長において集団の果たす役割は非常に大きく、特にも遊びを通して地域に自然発生的に生まれる集団が果たす役割は大きい。社会学ではよく「ギャング集団」という言葉を用い

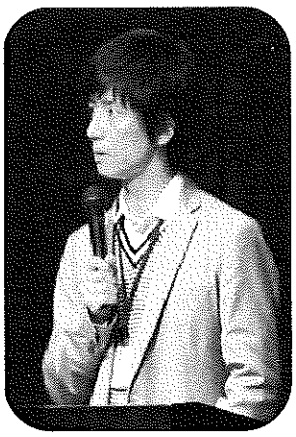
ますが、ガキ大将を中心とした異年齢集団という言葉に置き換えてもよい。「児童厚生施設は、集団発生しやすい場所、具体的には小学校区の中心部のできるだけ環境のよい所に設けられる。さらには、施設の中には運動できるところ、遊具が整っている体育施設、造園の施設、休養（ベンチ、芝生）の施設がある、夜間の照明がある」というようなことが書かれています。要するに、子どもたちがのびのび遊べて、しかもそこがたまり場となり、集団発生の場所になることを意図しています。２つ目に「子どもの自治による共同生活センターになろう」。言い換えると、ギャング集団的な自然発生的集団を元にして、子どもの自発的な共同意識を育む場所にしようと。それが、児童問題の発生の予防策になると言っています。児童館の各部屋の運営やクラブ運営を子どもに任せてよいなど、そこを舞台として子どもたちが生活を営む、クリエイティブなことをしていくことを重視しています。３つ目に、「それらを正しく指導する職員が常駐する場であること」。ギャング集団的集団は自治があったとしても、ややもすれば犯罪的な傾向になり得るから、それを正しく指導する職員が必要。それは監視ではなく、子どもの自治を支えるための指導をしながら、子どもの傍らにいるということ。さらには、常に施設内で生活する管理人の必要性を強調しています。生活の中に大人の協力者がいるという観念を抱かし得るように心掛けなければならないと書かれています。この３点の特徴を見ていくと、職員を配置して、地域を基盤にして、なにをどうするかという実践的意味合いについて、どう考えてきたかが見えてきますね。

指導者（児童厚生員）の役割

もう１点加えるなら、指導者（児童厚生員）の役割について、１９５０年に厚生省から出された「児童厚生施設運営要領」に詳しく書かれています。これは全部で７つありますが、中でも１つ目の「地域の状況を調べること。」これが重要であると考えられます。「すべての仕事は近隣の社会に関する理解がなければ、真の効果を発揮することができない。（以下省略）」　ここでは児童館と地域の関係、つまり児童館は地域を知らなければ、なかなか仕事ができない、ということが強調されているのです。

当時の理念から学ぶこと

正直なところ、以上の構想と実際の法的位置付けには著しいギャップがありました。１９７０年以降に児童館が整備拡充されたわけですが、これらの構想を受けてどう変わってこれたか、それを分析することで課題が見えてくると思います。確かに場を保障することについては積極的な意義がありました。一方で発達・生活を保障することの意義については充分に深められたかどうか、議論がなされたかどうか、それには少し課題が残るのではないでしょうか。子どもだけでなく、親の生活保障という話にも関わってくる問題です。これは現場の責任だけではなく、研究分野の責任でもあります。児童館は、その時々の健全育成の課題に対応していかなければならないということで、福祉施設でありながら教育的な機能を担いながら、または教育施設も福祉的な機能を担いながら、その時の社会問題に対応していく形でやってきたわけですが、拠って立つ根っこをどう深めてこれたでしょうか、根無し草状態ではなかったでしょうか？　根っこを保っていくという意味では、この構想段階での理念はこれからも生かされてしかるべきと思います。近年の放課後施策は、いかに大人の眼が子どもに届くか、安全・安心というところで展開されていますが、子どもたちの発達や生活を保障することが置き去りになっています。「とりで」を作って安全・安心を確保する（内向きのベクトル）のではなく、「基地」を拠点として地域で安全・安心を作っていく（外向きのベクトル）というイメージの必要性を感じます。児童館がここでいう「基地」になることが、その機能を最大限生かすことにつながるのではないでしょうか。



現場からのメッセージ＊2

波多野　里美 さん（京都府京都市 社会福祉法人健光園 ももやま児童館 館長）

このお話をいただいた時、私たちももやま児童館は方向性に迷い、戸惑い、行き詰っていました。原点に戻る機会をいただいたと考え、今日は揺らぎ・迷い・悩みを素直にお示しながら、私たちが大切に思っていることをお伝えしたいと思います。

はじめに、私の大好きな句をご紹介します。

『月影のいたらぬ里はなけれども　ながむる人のこころにぞすむ　（詠み人　法然上人）』

月の光はすべてのものを照らします。すべての人にくまなく降り注いでいます。けれども、月を眺める人以外月の美しさはわからないという意味です。これは子どもを見つめるまなざしにも通じている。月の光のように子どもたちは今、私たちに様々なことを発信しています。小さな身体にたくさんの可能性を秘めています。心を制して子どもたちを見つめ、やわらかい心で子どもたちと向き合うことの大切さ、そのことをこの句から教えられました。「ながむる人」のように、いま正面から子どもたちを見つめることのできる大人が本当に必要な時代と実感しています。

いま日本では政治、環境、子どもを取り巻く状況、様々な課題、問題が矢継ぎ早に浮かんできています。その状況の中で、私たちは自分たち児童館のあり方を考えざるを得ません。京都でも本年度から放課後子どもプランを本格的に実施。またつい先日、今年度の概算要求が発表されましたが、財源がスリム化していく中で、本当に必要なことに眼差しが向けられていると感じました。この時、児童館の存在に危機感を覚えました。当たり前と思っていた児童館の存在がわからなくなったことも。この社会で児童館はどんな意味があるのか、社会や地域で本当に必要とされているのか？　そんなことを考えました。開設以来これまでの９年間、無我夢中でやってきましたが、児童館として何をうってでたらよいのか、これからどこに向かっていけばよいのか？　自分たちは役割を果たせているのか？

京都市の児童館は長い歴史のなかで、子どもたちの遊びを通した健全育成を基盤に、地域の中で子どもたちの放課後や子育て支援を担ってきました。児童館の遊びの中で、また学童クラブの生活の中で、子どもたちが様々な力を培うことができるように援助を進めてきました。今、必要性や役割を問われ、原点に立ち戻る時がきたと思っています。

地域の拠点として、子どもたちに何ができるのか？　役割に思いを向けました。これまで出会った子どもたちや人々、関わりから、私たちが向かうべき方向、やり続けるべきこと、守るべきことを教えてもらったと思っています。

守っていきたい大切なことはたくさんありますが、その中の２つの大切なことを今日はお伝えしたいと思います。

●いつか もどってこれる場所　「児童館」

皆さんには、地域の中で帰れる場所、時、人がありますか？

ある１組の母と娘がいました。母の熱心な想いに娘がついていけず、母子関係の歪みがおこり、援助が必要な事案にまで発展してしまいました。私たち児童館職員は、彼女たちと本気で向き合いました。娘の将来のために。

経過の中で、やるせない想いをたくさんした母親は、辛く私たちにあたりました。でも、娘の小学校卒業式の日、児童館に親子で顔を見せてくれたのです。「けじめの時にお礼を言いたかった。また、来ていいか？」と。

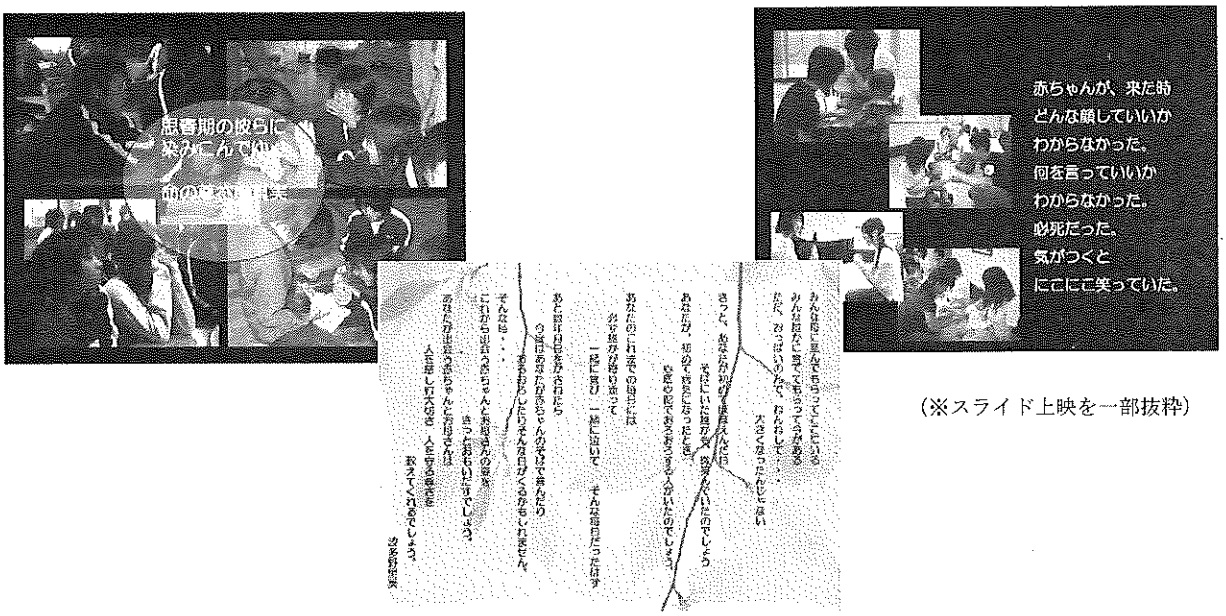
児童館は、巣立っていった子どもたちや親たちがまた帰ってくる場所です。その頃、自分たちが過ごした日々や向かってきた出来事を携えながら、ある時にはリセットをすることにもなるし、懐かしむことでお互いの力になれるかもしれない。やり切れない思いの整理にもなることもあるのでは。どんな理由であっても、誰でも帰れる場所が必要。そういうことを感じています。

●「受け止める 支える 共に歩む場所」

この思いを持つきっかけになったのは、１人の少年との出会いでした。小学校高学年の時から不登校だった彼は、毎日児童館に来ていました。眼を合わせるのも声を掛けられるのも嫌、それでも児童館にはやって来る。私たちは、適切な距離感に迷いながら彼を受け入れていました。そんな彼が高校生になった時、私はつぶやきました。「あなたが、児童館でアルバイトをしてくれるようになるのが、先生の夢やなあ。」長い年月がたった今、彼は児童館を支えてくれる存在になっています。

大きなことは考えなくていい、目の前にいる子どもたちや保護者をよく見て、よく聞いて、できることがわかればいい。それを形にすればいい。当たり前のことですが、そのことを再認識しました。

【中高生と赤ちゃんの交流事業の一場面より】



（※スライド上映を一部抜粋）

～最後に～

子どもたちに本気で向かい合う。全人格を掛けて‥‥いい時も悪い時も私はあなたに本気だよ。あなたのお子さんに本気で向かっていますよ。そのことは、子どもたちにはわかります。そして身体や心に刻んでくれます。子どもは優しい人や甘やかし、楽なことが大好きではありますが、それでも本気で向き合ってもらった子どもは、その意味を身体と心で感じると確信しています。大人も子どもも関係ない。魂のぶつかり合い、響き合いから生まれる事実、それを大切にしたいと思っています。

そして、懸命に向き合っている地域の人たち、その後ろで支えていく社会。制度や政策だけでなく、町内や近所で見守っていく風土づくりも、これからの児童館の課題や役割なのではないでしょうか？

現場からのメッセージ＊3

細川　由子 さん（岩手県矢巾町　煙山児童館　主任児童厚生員）

●児童館はだれのもの？

今回、児童館はいったい誰のものだろう？ということを考えさせられました。

矢巾町には児童館が４館ありますが、全て夜７時まで開館しているのが現状です。子どもの遊び場というより、親の就労の都合で預ける場所になってきていることを実感。中には、天気が悪いから預かって欲しいとか、兄弟げんかをするから児童館に置いていて欲しいなどのニーズもあり、私たちも預かることに慣れてきてしまっています。しかし、それに伴って子ども自身に変化がでてきたと感じることがあります。

それは、すぐそこで友だちが泣いていても気がつかない、気がついても何もしてあげられない。本棚の前で絵本を読んでいる子に、邪魔という理由で急に殴りかかる。それらは、悪意でもなく意地悪でもなく、ただ単に他人の行動や言動に関心を持てない、思いやりの気持ちが育っていないということなんですね。このままの状態で子どもたちには他人に対する思いやりや優しさが育つのだろうか、私たちは育てなくていいのかということから、「けむやま・わんぱくサポーター」を育成しようということで、４年前に始まりました。（※右ページ下　参照）

●けむやま・わんぱくサポーター育成

最上級の３年生が児童館を引っ張っていく。認定式もきちんとあり、館長からワッペンと認定書をもらい、ワッペンは常に身に付けています。行事の時のリーダーや司会、またはゲームを考えて実施、地域の方と一緒に子ども産直「わいわい夕市」のお店屋さんなどをしています。また日常生活の中で、困っている子に力を貸してあげられる児童館の正義の味方！という存在です。４年目になって、ようやく自覚が見られるようになり、下級生にたくましい言葉を掛けてあげるようになってきました。ただこれも、全員ではなくリーダーが得意な子もいれば、前に出るのが苦手な子もやはりいます。

もの静かでクールな３年生のＳくん。彼はサポーターと言われてもどうしていいかわからないのです。ある時、行事で子どもたちが騒ぎました。サポーターのＳくんに「静かにして！ と言ってちょうだい!」とお願いをしましたが、Ｓくんは困った顔をしながら、ようやく小さな声で「静かにして！」と。でも、みんなに聞こえるわけもない。他の時も困ったことがあると、私をじーっと見て訴えるだけなんですね。何か言うわけでもなく。そんなある日、台風で小学校が一斉下校になり、子どもたちが一気に児童館に帰ってきました。もちろん玄関がパニックに！　その時、突然Ｓくんが「押さないで！　一列になって入って！」と大きな声で叫んでくれたんです。私は驚きました。ようやく「自分が」という気持ちになったんだな。その子の成長が見え、嬉しかった瞬間です。

また、第１期のサポーターたちも、今年で６年生となりました。児童館祭りにスタッフとして手伝ってくれるようになったことも嬉しいことの１つです。

●地域に愛される児童館に

もう１つの試みは、もっとたくさんの地域の人に児童館に入ってきてもらい、子どもたちを見て欲しい、ということで、４年前から「児童館まつり」や「わいわい夕市」を実施しています。徐々に、お母さんたちからおりがみ教室をやりたいと言ってもらったり、民生委員さんが昔ながらのおやつを教えてくれるようになりました。犬の散歩ついでに、近所で見かけた気になる子どもについてお話しに来てくれる方も。いろんな方に関わってもらっていることが、厚生員にも子どもたちにも力になっていることを実感しています。

●児童館は『いつでもそこにある大切な場所』

ある日、中学生の男子にばったり会いました。彼は、小学校低学年の時に児童館に来ていた子で、その当時はわがままを言っては職員を困まらせていた子です。その彼が、久しぶりに会った私のことを一緒にいた友人に、「児童館の先生。小さいときにお世話になった。」と言ってくれたんです。私は彼に何をしてあげられたかなと考えましたが、彼にとって児童館は自分を出せる場所だった、それを無意識に受け入れてあげられていたんだなぁということに気づきました。

また、昨年まで児童館に来ていた小学４年生の女の子。４年生になってぱったり来なくなったんですが、この間久しぶりに来館しました。それが、なんと引越しの２日前。急に家庭の都合で引っ越すことになったとのことでした。とても複雑で不安定な家庭環境で、結局ご両親は離婚をしました。彼女はいつも夕方になると泣いてしまう子でした。頭が痛い、友だちに嫌なことを言われた‥‥など、何かあるとすぐに泣く。いつもお迎えのときは泣いた状態でお母さんにお返ししていました。今思えば、「泣きたかったんだろうな‥‥。」と。

子どもたちは環境に敏感で影響を受けやすい。それを受け入れなければいけないし、それにも慣れていくことができる。わがままを言ったり、すごく甘えたり、大人を困らせたり‥‥。そうやって楽に自分を出せる場所があるのとないのとでは大違い。子どもたちみんなに好き勝手にやられたら、それは大変だけれども、子どもたちが自分を出せる場所や機会、それを作ってあげるのが、私たち厚生員の仕事だと実感しています。

教師とも親とも違う大人、児童厚生員。学校とも家庭とも違う場所、児童館。これはすごく曖昧。故に児童館ってなに？と悩んでいる先生方も多いのではないでしょうか。けれども、曖昧というのはすごい意味がある。怒り役の先生だったり、お母さんのようだったり、お姉ちゃんのようだったり、友だちのようだったり‥‥。お母さん方にとっても、児童館の先生だったり、ママ友だったり、おせっかいのおばちゃんだったり、何にでもなれる。お母さんがお仕事をするようになってからお漏らしするようになったという１年生の女の子がいました。このことを学校の先生には相談できない。家庭で言ったとしたら、ほらみろ！お前が仕事をし始めたからだろうと言われてしまう。だから、だれにも相談できない。けれども、児童館では話せた。楽に自分を出せる児童館はすごく重要と感じています。

先程の（トークセッションの）話で、児童館は総合的な寄り合い所にならなければいけないという話を聞き、それであればいじめも虐待もなくなるのでは、と思いながら聞いていました。私たちの児童館は２３年目を迎え、当時の小学生が、今、親となりその子どもたちが利用するようになってきました。さらには保護者会の役員として児童館を支えてくれるようになってきています。１０年後２０年後、自分がどこで何をやっているのかわからないけれど、子どもたちが大きくなって大人になり、子どもを育てるようになったときに、先程話した中学生の彼のような気持ちで児童館を見て支えてくれたら、厚生員冥利に尽きるな。子どもにも親にも安心できる匂いを残してあげられるように、１日１日丁寧に仲間たちと楽しく仕事をしていきたいと思っています。

「わんぱくサポーター憲章」

1. 私たちは、たくさんの友だちと元気に仲よく遊びます。
2. 私たちは、困っている友だちを助けます。
3. 私たちは、仲間と力を合わせて、どんなことにでもチャレンジします。
4. 私たちは、『いじめ』を　ぜったいに許しません。

「ひとりは　みんなの　ために
みんなは　ひとりの　ために」

分科会報告

９つのテーマに分かれ、
熱い議論が繰り広げられました！

第１分科会

「児童館・放課後児童クラブ
スタッフの情報交換」
～放課後の子どもを真ん中に
みんな集まれー！～

第２分科会

「子どもの姿になにをキャッチ！？
その心に寄り添える大人に」

第３分科会

「中高生の居場所はどこに？！
児童館（地域）の可能性を探る」
～「思春期」真っ只中の
若者たちと本音でしゃべり場！～

第４分科会

「発達障がいについて、
聞こう、学ぼう、感じよう！」

第５分科会

「あそびで発見！
子どもの力・あそびで発信！
児童館・児童クラブの魅力」
～みんなで育てよう
「遊びの力」～

第６分科会

「気づこう！子どもの思い、
語り合おう！
私たちにできること」
～気づけば子どもって
こんなにステキ！～

第７分科会

「地域で育てる大きな未来」
～自分を認められる
子どもと大人でいるために～

第８分科会

「ここがツボ！
児童館マネジメントを
良くする方法を求めて」

第９分科会

「子どもの安全・安心と
リスクマネジメント」
～ひとが創りあう安全、
ひとがはぐく（育）む安心～

第1分科会

「児童館・放課後児童クラブスタッフの情報交換」
～放課後の子どもを真ん中にみんな集まれー！～

～参加者数　３８名～

＜ゲスト＞　・深作　拓郎さん（弘前大学生涯学習教育研究センター　講師）
＜水先案内人＞　・橋本　有紀　（本宮学童保育クラブ）
・伊吹山　恵理子（岩手県学童保育連絡協議会事務局）
・古澤　聖子　（岩手県保健福祉部児童家庭課）
・杉田　博信　（盛岡市保健福祉部児童福祉課）

１．はじめに

放課後の子どもたちと関わっている私たち。他の児童館・放課後児童クラブの子どもたちの様子はどんな感じだろう？　今の子どもたちの様子から感じる事は？　など日頃の思いをどんどん語り合い、これをきっかけに児童館・放課後児童クラブに関わらず、子どもを中心としてネットワークを広げられたらいいなと思い、このテーマにしました。

２．分科会の流れ

① 受付後、参加者に日頃の思いや分科会で議論したい事をポストイットに書いてもらいました。
② 水先案内人自己紹介、ゲスト紹介
③ アイスブレイクゲーム、子ども観についての話（ゲスト）
④ 参加者の思いを基に情報・意見交換
⑤ まとめの一言（ゲスト）

◎参加者同士の顔を見ながら話をしたいという事で、円形に席を作りました。

３．内　容

●ゲストによるアイスブレイクゲーム、お話

様々な指導員や厚生員、放課後児童クラブの人がいるが、みんなの気持ちは子どもを中心に光を当てたいという事だと思う。子ども観については、共有されているのか？　議論はされてきたのか？　今まで足りなかったことではないだろうか？　今までの議論は遊びの技術や職員の待遇だったが、今日は子どもを真ん中に置く事を考えていく。私は、『子育ち』子どもを真ん中にする考えを大事にしている。

●参加者の思い、議論したい事を基に意見交換

○日頃の遊びについて

～ゲーム機の持込を許しているか？～

⇒持って来ていい

・決まりつきで。

（長期休みのみ、ソフトの数を決める、

貸し借りなし、名前をつけて、など様々。）

・持って来てはだめという決まりがない。

持って来てはだめ

・学校帰りにそのまま利用するため。

・家で出来ない体験をさせたい。

・みんなで遊ぶという考えが自然と

できている。

○携帯電話はどうか？

⇒学校しだい、習い事をしている人のみ、保護者からの希望があったらなど、きまりを決めて許可しているところもあり。

○危険なものについて

・子どもから危険物を排除するばかりではなく、ナイフを使ってみる等、経験を積んで技術を高めさせたい。

・経験を積んでわかる危険もある、無知が一番危ない。

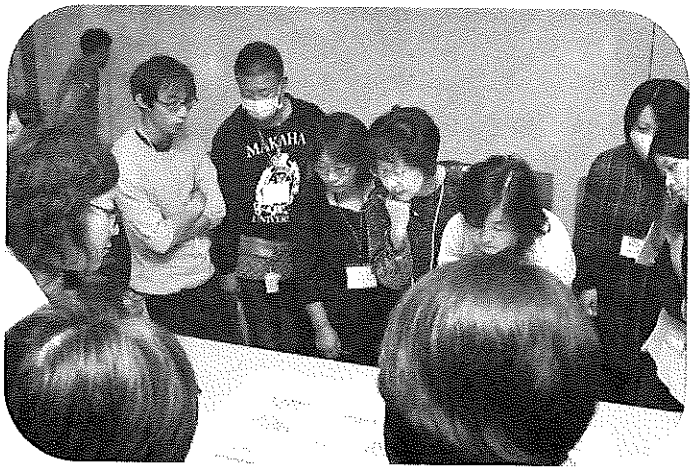
○叱り方のコツ、子どもを叱るときに気をつけていること

・何度言っても変わってくれない子への対応⇒見方を変えてみる？ 子ども同士で話し合いをしてみる。

・子どもを叱るだけではなく、評価する事も大事。その場を見極め、個別に、または集団でなど。大人との信頼関係も大事。

・学校と違い、児童センターや学童クラブは評価のない空間。誰でも、ヒーローになれる。子どもはいろいろ表情がある。

○岩手県内にどのくらいの児童クラブがあるか知りたい。



○保護者への対応について

・厚生員（指導員）と保護者の間に食い違いがある。なかなか、うまく気持ちを伝えられない。

○指導員同士の子どもへの対応に違いがある。

・指導員が多いと意見の不一致が起こることもある。どのように同じ考えにしていくかも課題。

○どんな研修をしているか

・発達障がいについて、防犯対策、AED など、遊びについて

・児童福祉のガイドラインがでている。その中に、研修会、共通理解につながるものがある。ガイドラインについて勉強をしてみるのもいい。

●まとめ（ゲスト）

・視点を子どもたちに向けて、長い目でみる事が大切である。２０～３０年後、子どもたちが大人になる頃、子どもたちに何を託すのか？

①子どもに遊びを通して生活を保障していく。

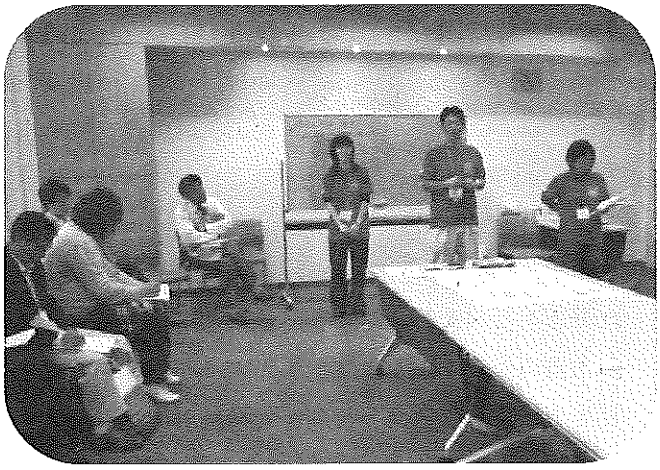
②親自身も育つ存在になるということ。

・職員には色々な実質がある。たくさんの仲間がいる。横（地域）の連携（ネットワーク）、仲間を増やして現場で頑張ってもらいたい。最後には、子ども観につながる。

４．まとめ

限られた時間の中でも、様々な課題が出され、参加者のみなさんと意見交換ができました。おそらく、もっと追求したい！と思う方もいたでしょうが、人数が多かったので難しかったです。しかし色々な思いを持って参加してくれた事が分かり、全国から子どもたちのことを本気で考える大人がこんなにも集まり、交流できた事は意味がある事だったと思います。

この会をきっかけに、どんどん仲間と手をつないでいけたらいいなぁと思いました。



（報告者：橋本　有紀）

第2分科会

「子どもの姿になにをキャッチ！？その心に寄り添える大人に」

～参加者数　５０名～

＜ゲスト＞	・千葉　仁一さん	（先人記念館　館長）
	・野崎　智恵子さん	（盛岡市立桜城児童センター　館長）
＜助言者＞	・奥山　千鶴子さん	（ＮＰＯ法人　びーのびーの　理事長）
＜水先案内人＞	・鎌田　正子	（盛岡市母親クラブ連絡協議会）
	・関村　和絵	（盛岡市母親クラブ連絡協議会）
	・西山　麻由美	（盛岡市母親クラブ連絡協議会）

１．はじめに

昨年に続き、「子どもの姿から感じることはなにか。子どもに寄り添える大人になる為に私たちの心はどうあるべきか」。今回は、親の目線からと厚生員の目線からとアンケートを元に、テーマに沿い盛岡市母親クラブが水先案内人となり全国から集まって頂いた、児童館館長、児童厚生員、小学校の校長先生、ＮＰＯ法人、行政、大学生、母親クラブと様々な立場で話し合いをしました。

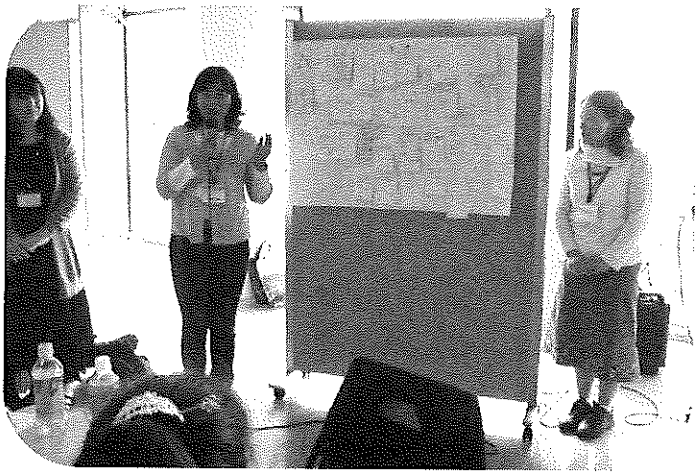
２．分科会の流れ

６班に分かれてアンケートをもとに、４つの項目に対しての意見をポストイットに書いていただいた後、模造紙に貼り、皆さんのご意見が一目でわかるようにしました。

３．内　容

『家庭でもなく学校でもない子どもの居場所　児童館！』ということで、日頃直接子どもたちをみている児童厚生員のみなさんが日々感じていること４つをグループに分かれ、話し合いました。

①「言葉遣いやマナーが悪い」
②「生活習慣、かたずけが出来ない」
③「子ども同士のトラブルや
コミニケーションとれない」
④「親子のコミニケーションが
出来ていないように感じられる」



①に関しては、親には良い子に思われたくて、家では良い子でいて、その分児童館でストレスを発散し、時には「死ね！」と言う言葉が出てしまう子どももいる。②は片付けのときになると、自分はこれは使っていないと言い、片付けをしない。迎えにきた親も片付けない。③に関しても自分の思いを伝えるのが上手く出来ない。弱い子には何人も組んで強く言うなど。④は厚生員が気になる子どもの親ほど、子どものことに関心が無い。「お母さんに言わないで」と親の顔色を見る。親同伴で来館しても子どもは職員に任せ親同士でお喋りが多い。
以上のことが意見として出されました。

4．まとめ　＜助言者のコメント＞

○　野崎　智恵子さん

第２分科会に大きな意味を実感しました。グループディスカッションはとてもよかったです。子どもを思う熱意、気持ちから本音で話をしていたと思います。私自信、学校教育が中心だったが、地域施設にお世話になり、違う視点で学べました。児童センターや児童クラブは子ども達が来るから課題が出てくる。例えば外に飛び出す子ども、お弁当のない子に厚生員がおにぎりを買ってくる。親の様子や子どもの姿、たくましさと付き合っているのです。私たちは教えるというよりは、向き合う、発見する、付き合うなど子ども達とお母さん寄りの接し方をしています。子どもの今日の様子をストレートに親に伝えるのではなく、言い方を変えて伝えていくことが大切であり、児童クラブや児童センターでの様子や課題を伝えていきます。

○　千葉　仁一さん

私からは４つの点について話をしたいと思います。１つ目は子どもに接する姿勢についてです。自分の子どもと同じように接することが大切です。「優しさと冷たさ」よりも「厳しさと暖かさ」が必要です。子どもは未来からの預かりものであり、未来の期待、希望だと思っています。

２つ目は、私たちはうるさい近所のおばさんでよいと思います。今、地域にはそのような役割の人がほとんどいなくなっています。現在では厚生員がその役割を担っています。命にかかわることやダメなことはダメと教えてくれる環境が必要。大事な事は叱り、注意をするといつかはわかってくれるようになるようです。

３つ目は悩みを自分だけで抱え込まないことが大切です。学校や保護者と連携を図り、一緒に解決することが大切である。表面を見るのではなくその行動の背景を見つめていかなければならない。

４つ目は学校でもなく家でもない、児童センターは子ども達にとって大切な場所なのではないかと思います。本心を出している子が多い。もっと遊んであげたい、寄り添ってあげたい、一緒に遊

んであげたいと思っても現状はなかなかそうもいきません。

同じ年代の子ども同士でケンカなどを通して社会性を身につけていくのです。現在はそのような場も兄弟の数も減っています。だからこそ児童館などでの関わりが大切になっているのです。

○　奥山　千鶴子さん

グループディスカッションの中で多くのことを学びました。１つ目は親子支援についてです。子どもも親も互いに育ち合い学び合う環境が大切です。子どもの姿を見て親が幸福感をもてたり、親の姿を見て子どもが育つというような、相互補完的な関係を意識していかなければならないと思います。

２つ目は子ども３人がお世話になっている学童保育に私自身も育てられたということです。子ども自身の大切な思い出作りに親も参加する機会がたくさんあります。また、月に一度、手書きの通信を出したり、写真を掲載したり、子どもに書いてもらったりしています。

３つ目はコミュニケーションについてです。心を傾け、「聞く」ではなく「聴く」姿勢を持つことが大切です。時間をかけて「聴く」と、必ず理由があり、背景がわかれば向き合う事ができます。人と向き合うことは大変な仕事ですが、私達がやっている事には意味があると信じて、共感し合い、そこに関わる私達自身が協力し合うことが大切です。

終わりに、分科会を終えて皆さんが口にした事は、子ども達の問題だと思える姿は子ども達ではなく、正に親の姿そのものであると・・・

私たち母親クラブ（親の会）の活動の意義がそこにあることも再認識をした分科会でした。

（報告者：鎌田　正子）

第3分科会

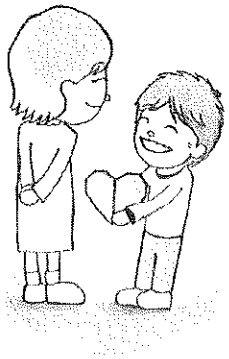
「中高生の居場所はどこに?! 児童館(地域)の可能性を探る」
～「思春期」真っ只中の若者たちと本音でしゃべり場！～

～参加者数　６６名～

＜ゲスト＞	・吉田　孝さん（元ジュニアリーダー）
	・水沢ジュニアリーダーズクラブ「ＪＵＭＰ」のメンバー
	・久慈「みどりの子ども会」Dreamsブロッコリー/グリーンピースのメンバー
＜助言者＞	・天野　秀昭さん（ＮＰＯ法人日本冒険遊び場づくり協会　副代表）
＜水先案内人＞	・大村　千恵（奥州市水沢青少年育成市民会議）
	・高谷　淳子（みどりの子ども会）
	・下田　定子（種市放課後児童クラブ　どりーむキャンパス）

１．はじめに

命のはかなさ、人間の弱さを感じる青少年事件が多発しています。幼児期からの成育の歪みが、思春期に噴出す現象でしょうか。現代の子どもたちの問題点が何かを考えたとき、「自己中心的、他者との関係がつくれない、打たれ弱い」という３点が浮き彫りになりました。また、一見しただけではわからない複雑怪奇な心の闇を抱える少年少女も増えつつあります。こうした課題を抱える子どもたちに共通した人間像は、孤独で孤立しているということ。ここに着目し、“一人ぼっちをつくらない運動”を展開するコア施設としての児童館・児童クラブ(地域)のあり方や可能性を探りました。



２．分科会の流れ　／　内　容

①受付後、中高生のリードにより参加された方々に折り紙でハートを折っていただき、最後に心と心をつなぐメッセージカードとして活用していただきました。

②中高生によるアイスブレーク“キャッチ”ゲームをみんなでにぎやかに実施。みんなにこにこ顔になり、まさしく心が柔らかに融けました。

③【ミニトーク】

グループトークへの導入としてファシリテーター大村の質問に若者が答える形で進めました。「児童館(児童センター)の思い出をひとつあげるとすれば？」「地域の中に自分のステージを持てたことで、何か自分に変化があったか？」の２点を中心に若者たちに問いかけ、特に吉田孝さんには今の職業に就くきっかけとなったエピソードなどを話してもらいました。たどり着く過程において居場所がキーワードであり、欠かせないものであったことが話されました。

④【グループトーク】

若者と大人をミックスした８～９人ずつに分かれ、ひざを交えて本音の話し合いが展開。まずは自己紹介。大人の参加者には第３分科会の選択理由と今抱えている課題を入れてもらい、中高生にはミニトーク

で伝え切れなかったことを補足。その後は自己紹介で出た内容を整理し、グループの中での課題や興味・関心に絞って話し合いました。

⑤参加者全員が集合し、この分科会に参加したことによる自分の心の変化などを発表しあい、互いの思いを共有しました。

⑥最後に助言者の天野秀昭さんから次のようなアドバイスをいただきました。

『子どもにとっては、仮面をつけなくてもいられる場所があるということが大事。自分を飾らないで、素な自分を認めてもらう関係をつくる場所を目指していきましょう。』

中高生からのメッセージ

- 「一俺のことを勝手に生みやがって…。と親に反発していた時期があった。家にも学校にも居場所がなく、何の目標も持てずにモヤモヤしていた頃、地域の大人に声をかけられてボランティア活動に参加した。そこで、今のサークルに出会い心を許せる仲間ができた。昨年“命を考えるワークショップ”で擬似出産体験をしたとき、子どもを産み育てることの大変さに気づき、心から親に感謝したいと思った。」
- 「私は不良でした。中学生の時から酒や夜遊びを覚え、毎日のように夜更けまで遊び歩いていましたが、ちっとも満たされなかった。そんな時、地域の子ども会からジュニアリーダーとしての誘いがあり、小学生の子たちと触れ合いました。とっても楽しくて、これが本当の幸せだと感じました。自分は変わることができた。まわりには変われず苦しんでいる仲間がいます。これからは、地元に就職して親を助けながら、悩んでいる人たちの支援をしていきたい。」
- 子どもの居場所(ホワイトキャンバス)や子ども会(みどりの子ども会)での仲間や先輩とのふれあいの影響が大きい。
- 憧れる先輩がいることで自分の気持ちが変わっていった。成長していった。
- 人前で、自分の言葉で自分を表現できるようになった。また、常々努力している。
- 大人にほめられ、認められて大人を信じることができるようになった

居場所

道具、空間がなくても会話があり楽しめるところ　信じてくれる大人がいるところ
楽しいから忙しくても行きたくなるところ　思いやりがある大人がつくっている場所
楽しさ、生きがいと自信をくれた場所（友人も誘えた）　干渉し過ぎない関係
後輩のために活動を企画することの楽しさを知る場所

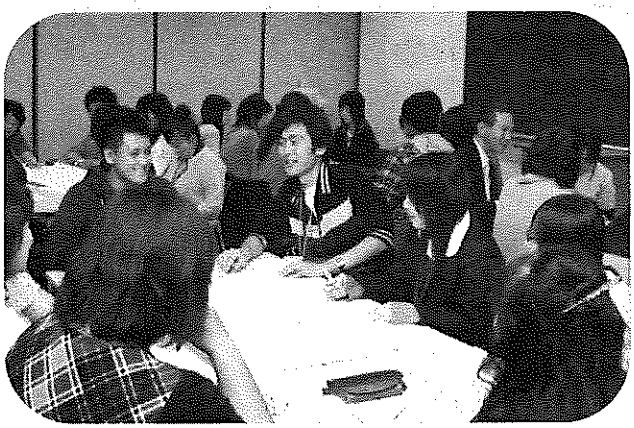
大人感

目標！

子どもを守り、助けてあげる大人になりたい
子どもの思いを受け止め、認めてあげる大人になりたい
かかわりを持つことでまた会いたいと思われる大人になりたい
地域の大人と話せる関係をつくりたい

★参加した大人の意見

・思いを共有できる場所の必要性（小中高生等の異年齢世代が自然に触れ合う場所）
・小学生までいて卒業してしまうと行かれないところと思ってしまう･･･ＰＲ必要
・「いいところだよ！」と思うところは口コミでも広がっていくはず
・無理しないで、自然の流れで、地域のニーズに合わせて作られるのが必要
・押し付けた話し方はしない
・魅力あるスタッフ、厚生員像（あの人に会いに行きたい！）
・ニックネームで呼び合う関係が人とのつながりを強くしていく（心を開く関係）
・先生でも親でもない関係で素になって話ができる関係



和やかな雰囲気のグループトーク

３．まとめ

地域社会における育成支援の対象から抜け落ちている（忘れられている）世代、いわゆる年長児童（中高生）こそが居場所やよりどころを求めています。

幼少期から思春期までの発達段階に応じた育成支援が大切です。『思春期』の若者たちは、周囲からまゆをひそめられがちですが、その多くは純粋でひたむきに人生と対峙しながら、社会で意義ある役割を見出したいと懸命です。

今回の分科会では、世代を超えて互いの心を伝え合い、理解を深め合いながら、居場所(児童館等)のあり方についての**「気づきや方向性を見出す場」**となりました。

（報告者：下田　定子）

まとめの会で感想を語る 高校生

第4分科会

「発達障がいについて、聞こう、学ぼう、感じよう！」

～参加者数　１１３名～

＜ゲスト＞　・小川　博敬さん（社会福祉法人フレンドシップいわて虹の家　総括主任）

＜水先案内人＞　・佐藤　真名　（社会福祉法人カナンの園奥中山学園）

・田中　多美子　（洋野町大野児童館）

・駒井　えり子　（盛岡市立山王児童センター）

・佐々木いずみ　（盛岡市立川目児童センター）

１．はじめに

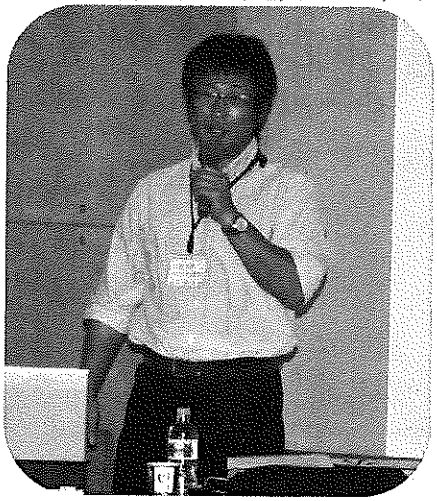
子どもと関わる仕事に携わっていると、しばしばこれまでの自分の出会った子どもたちとは少し違うな、と思う子どもに出会うことがあります。いわゆる「気になる子」の存在です。その中で、どうも「しつけ」や「家庭環境」などだけでは説明できないような、コミュニケーションや人間関係の取り方、決められたルールを守ることが難しい子どもたちがいます。そして、それらの子どもたちを目の前にして、行動の背景や原因は何だろう、どう対応すればいいのか、他の子どもたちとの関係や保護者との関係など、難しさを感じている方々が多くいることを実感しています。

関わる私たち大人が、ちょっと違う世界を持っていると思っている彼らの世界を理解してみようとすることで、新たな関わりの糸口が見えてきたり、これまで気がつかなかったことに気づかされることがあります。長年、発達障がいの方々と関わって来られたゲストをお迎えして、彼らの世界の疑似体験なども交えながら、発達障がいを持つ子どもたちのことをもっと知り合えたらと分科会を企画しました。

２．具体的な内容や様子

疑似体験については、進行役となった水先案内人とゲストが以下のようなやりとりしながら進めました。

「身体障害の方々や老人のハンデキャップ体験は、世間で大分なされるようになり、その方法を聞くと、その中身を直接体験が無くても、想像できるようになってきました。その多くは、体のある部分を不自由にしたり、制限することで体験出来るからなのだと思います。ところが、自閉症や学習障害などのいわゆる発達障がいを持つ方々の不自由さや感じ方は、脳の機能の特徴や感覚面によるところが多いと言われ、なかなか容易にイメージを持つことが持てません。



しかし、実際のところ、そのような障がいを持つと言われる方々から話を伺ったり、実際の様子を見ていると、私たちも**特定の条件下では**、同じように混乱し、間違え、特異な行動を取らざるを得ない場合もあります。」

例えば‥‥。

＊アスペルガー症候群と言われている方を講演会の講師に招いた時、スタッフにとても細かい注文がなされていた。「写真は最初に〈裁判所形式〉で撮り、その後は取らないこと。話している最中に写真を取られると意識が飛んでしまうから。」「関係者との挨拶の際、名刺は最初の１人にして欲しい。次々と人に会い、名刺交換するのは、とてもエネルギーを使い、疲れてしまうから。」など。皆さんは、そんなものかな、と思うかもしれませんし、そんなに重要なことには思えないかもしれません。

では、実際に体験してもらいましょう。

⇨参加者の１人Ｋさん。椅子に座ってもらい、他の参加者が次々とＫさんのところに来て自己紹介をしながら挨拶をしてもらう。１人、２人、３人‥‥。初めのころ、にこやかに挨拶を交わしていたＫさんだが、次第に様子に変化が現れる。手の平に汗をかいたようで、手を拭う仕草をし、やがて表情にも戸惑いや混乱の様子も‥‥。５０人ほど続いたところで、ご本人からギブアップ。

終了後、ご本人にインタビューすると、「だんだん名前を覚えることも出来なくなり、心臓がドキドキして、手に汗をかき、やがて目線に圧倒されるようになり、これが延々と続くならもうダメだ、と思いました。」とのこと。

先ほど話されたアスペルガーの方の気持ちがわかる気がした、ともお話下さいました。

このような疑似体験を共有した後、以下のコメントが進行役からありました。

「Ｋさんに実際に体験していただいたのは、〈極端な例〉と言えます。私たちの日常の中ではこのような経験はまずあり得ません。しかし、感覚的に敏感であったり、許容範囲が狭かったりすればこのような状況になり得るのです。だとしたら、私たちも、その方が持つ感覚的な敏感さなどの捉え方・感じ方と、置かれている状況がその人にとってどうか、ということに想像力を働かせてみると、その方の状況が見えてくるのではないでしょうか。」

その後も、ゲストの小川さんにリードしていただきながら、読字障害の方の状況などを疑似体験してみながら、会は進みました。さらに小川さんからは、日ごろ接する多くの自閉症や他の発達障がいと言われる方々の具体的な様子や、その背景となっているご本人の感覚、感じ方などについて、そしてそのような方々への具体的な伝え方や手がかりなどの例も紹介していただきました。ここでは紙面が限られているので、具体的な報告は出来ませんが、その多くは特別な機器や技法を用いるものではなく、私たちの

日常生活の中でも見かけるような「ちょっとしたアイディア」「ちょっとした配慮」というものでした。

そして、これらは実際に日常生活の中で混乱したり、不自由さ、困り感などを感じているご本人を、周りにいる人たちが良く見て、感じて、想像力を働かせていく中で、考えついたものであることも感じ取ることが出来ました。

今回、疑似体験を通して各自が感じたことを日常の関わりの中で思い出し、ぜひ想像力を働かせて目の前にいる方の立場に立った関わりをしていきたいと改めて思わされました。

3．まとめ

昨年のプレ大会でも、やはり発達障がいの方々についての分科会を企画しました。その会のゲストとして来てくださった花巻病院の木村先生が「診断は、それ自体で終わってしまったなら単なるレッテル貼りで、そのこと自体にはあまり意味はない。むしろ、診断することによって、適切な治療、援助、配慮などがなされてこそ、診断そのものの意味がある。」とおっしゃったのがとても印象に残っています。

今回の分科会は、単なる知識を得る為の学習会的要素や、それぞれの体験や悩みを語り合うことなどよりは、疑似体験に時間を多く用いました。生身の生きている一人ひとりと関わる私たちもまた、生身の一人です。互いの違いをわかり合いながら、共感することができたなら、きっとその方が望む援助、配慮などへの一歩が始まるように思います。この会で出会った方たちとも、それぞれの立場で子どもたちの幸せと健全な成長を願って結びついていきたいと思いました。

（報告者：佐藤　真名）

第5分科会

「あそびで発見!子どもの力・あそびで発信!児童館・児童クラブの魅力」
～みんなで育てよう　「遊びの力」～

～参加者数　９３名～

＜ゲスト＞
・小岩　孝子さん　（仙台市東四郎丸児童館　館長）
・佐藤　暢哉さん　（岩手県立児童館いわて子どもの森　プレーリーダー）
・大木　裕香さん　（花巻市矢沢第二学童クラブ　指導員）

＜水先案内人＞
・豊島　まり子　（盛岡市立松園児童センター）
・佐藤　裕規子　（矢巾町立不動児童館）
・門馬　経一　（花巻市とうわ子ども未来館）
・吉田　ヨシ子　（盛岡市立上田児童センター）
・有村　里江　（盛岡市立城西児童センター）
・千原　愛　（岩手県立大学ボランティアサークルあいもり）
・中村　寿子　（盛岡市立加賀野児童センター）
・伊藤　沙耶香（盛岡市立北松園児童センター）
・平野　光子　（盛岡市レクリエーション協会）
・若林　みどり（日本ｸﾞｯﾄ･ﾄｲ委員会岩手支部）
・細川　俊子　（日本ｸﾞｯﾄ･ﾄｲ委員会岩手支部）

１．はじめに

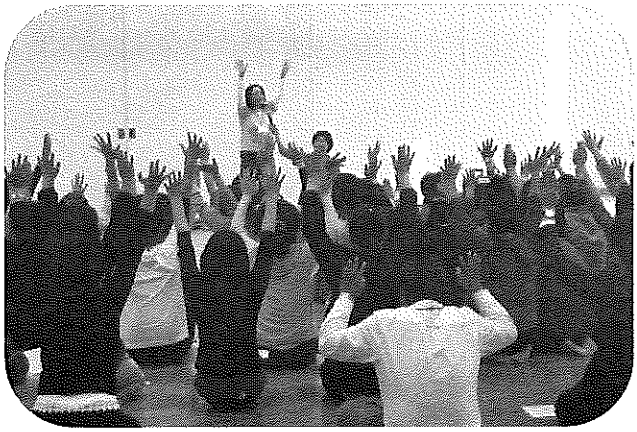
児童館･児童クラブの主役は子どもたち。なのに、行事になるとお客さまになってしまう。子どもが主人公になれる遊びや行事にしたいのだけど、みんなどうしているのか知りたいという気持ちから始まった分科会です。

「子どもが主人公になって活動を進めている」児童館から、事例発表していただき、又、児童館にとって、遊びは「命」。楽しい遊びのヒントを探っていこうと、あそびのレシピ集から「ウーロン拳」と盛岡発ダンス　NHKいわてみんなのうた「たらりら」をみんなでやってみることにしました。

全国から大勢の方が集まったので、まずはアイスブレイク。次に、前述の活動を入れ、最後にそれぞれの児童館･児童クラブがどんな活動をしているのか情報交換会という流れで進めました。

２．分科会の流れ

（1）　アイスブレイク
（2）　事例発表
（3）　盛岡発　ダンス
　NHKいわてみんなのうた「たらりら」
（4）　情報交換会



3．内　容

（1）アイスブレイク

○岩手県花巻市矢沢第二学童クラブ　指導員　大木　裕香さんから

「だるまさん」、「てんぐさんのはなはな～エイッ」、「いつでもどうぞ」、「タイさんとタコさん」の４種類のゲームを教えてもらいました。どれも簡単で体一つでできるゲーム。集中しないとできないので、皆さん笑いながらも真剣に取り組んでいました。

○岩手県矢巾町立不動児童館　主任児童厚生員　佐藤　裕規子さんから

ウーロン拳を教えてもらいました。あそびのレシピ集に載っているものですが、一言で言うとじゃんけんの「グー・チョキ・パー」を拳法風の体を使ったダイナミックな動きにしたもの。まずは基本の３つの技を覚えてから「第１回全日本ウーロン拳選手権大会」を開催。優勝者には「日本ウーロン拳協会(架空)」よりメダルと認定証が贈られました。遊び心いっぱいのひとときに参加者のみなさんは子どもになった気分で楽しんだ様で、会場全体が笑顔であふれていました。

（2）事例発表

①地域を変えていく「チーム東中田っ子」の勇気と力

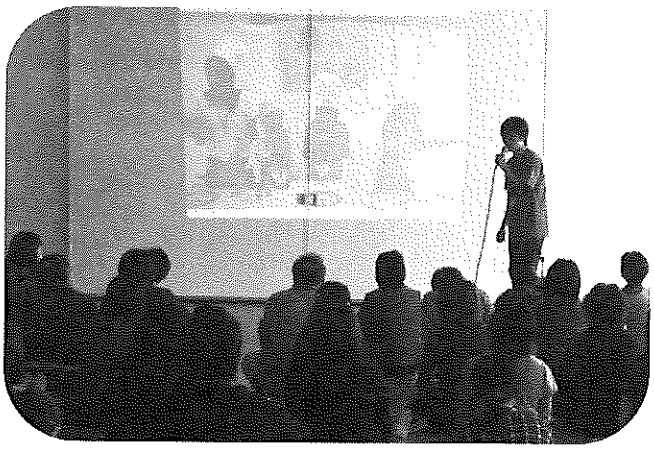
仙台市東四郎丸児童館館長　小岩　孝子さん

子どもたちを中心に企画･実践を行なう「チーム東中田っ子」の活動を紹介してもらいました。

企画するのは東中田の小･中･高校生と大学生ボランティア、参加するのは地域の大人と子ども、応援は地域ぐるみです。

初めの年は「手をつなごう、あなたと私。ｉｎ東中田」というテーマで子どもたちが１年間の行事・イベントの企画を立てました。この時、小学生が一番に協力してくれました。クリスマスパーティをしながら活動報告会をしたら、「来年もやろうよ！」という声が出て、次の年もやることになったとのことです。２００８年のテーマは「地域とエコ」で、東北福祉大にも協力してもらい、大学祭で小学生が発表をしました。２００９年は「昭和の人の話を聞きたい！」という声があがり、地域のおじいちゃん、おばあちゃんにウォークラリーをしながら会いに行きました。

地域の子ども、おじいさん、おばあさん、皆が主役になれるチーム東中田っ子の活動でした。



②「とり＋かえっこ」

岩手県立児童館　いわて子どもの森

プレーリーダー　佐藤　暢哉さん

子どもたちが自主的に参加する企画「とり＋かえっこ」の紹介をしてもらいました。

子どもがいらなくなったおもちゃを持ってきて、それをポイントに変えて新しいおもちゃをゲットできる。それが「とり＋かえっこ」です。おもちゃを持ってこない子どもでも、

職業体験やゲームでポイントをためて、おもちゃを手に入れることができます。ちょっと高価なおもちゃはオークションにかけられます。ポイントのシールをつけるのは全て子どもたち。大人は口を出してはいけません。

子どもたちはほとんど初対面だけど、お仕事しているうちに仲良しになれるとのことでした。

(3)盛岡発 ダンス「たらりら」

第５分科会 企画運営委員「チームＮｏ．５」の仲間たち

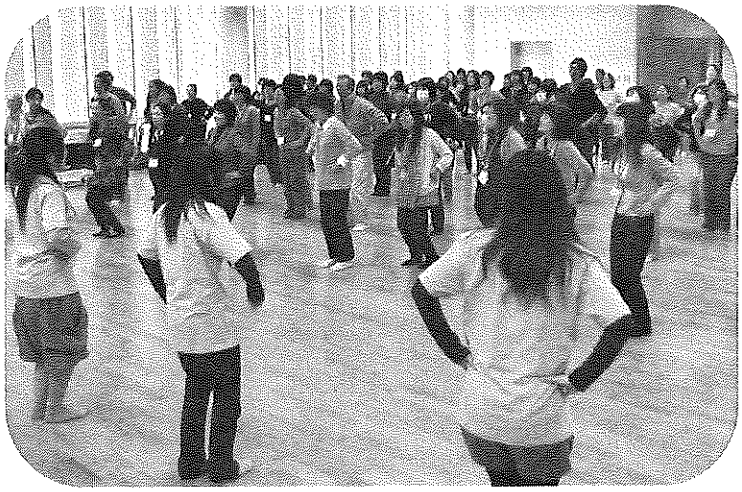
盛岡のご当地ソング　ＮＨＫいわてみんなのうた「たらりら」にあわせてみんなで踊りました。振り付けをしたのは第５分科会企画運営委員。会場がダンスを通してよりいっそう和やかになりました。

(4)情報交換会

１４グループに分かれ、それぞれの児童館･児童クラブでおこなっているあそびや、行事の紹介をしました。１グループ５～７名でしたが、皆、話したいことがたくさんあり、活動紹介だけでなく悩みなども出て活発な情報交換会となりました。

鬼ごっこや、マンカラ、お化け屋敷遊び、館庭のあるところはできるだけ自然と触れあうようにしたり、野菜づくりから食育をすすめたり、高学年の児童の活動の中におやつづくりを入れたり、それぞれの児童館、児童クラブが日々工夫している様子が伝わってきました。

４．まとめ



２つの事例発表から、子どもたちが自主的に活動を進めていくためには、大人が子どもたちを信頼し、話をよく聞き、子どもの目線に立つことが大切であると感じました。そして子どもと一緒に大人も楽しむこと。アイスブレイクやダンスの場面では、「遊びは、厚生員と子どもたちが一緒に楽しむことにより、アイデア次第でより楽しいものにどんどん変化していく」ということにみんなで気づくことができました。

情報交換会の内容はいろいろで、それぞれの児童館･児童クラブの活動の豊富さと地域性を物語るものでした。児童館･児童クラブの存在が地域にとって確実に必要な場所になっている証であると感じました。

(報告者：豊島　まり子)

第6分科会
「気づこう！子どもの思い、語り合おう！私たちにできること」
～気づけば子どもってこんなにステキ！～

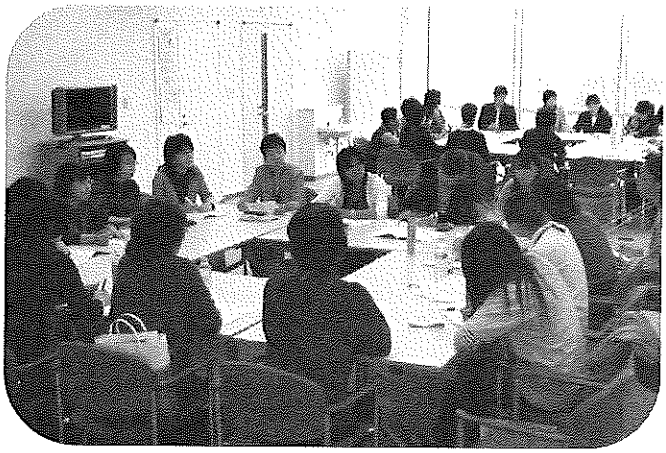
～参加者数　７１名～

＜ゲスト＞
- 三田　敏明さん　（花巻市教育委員会　教育相談員）
- 藤原　由美子さん　（岩手県PTA連合会　顧問）
- 吉田　智子さん　（岩手大学　非常勤講師）
- 米田　ハツエさん　（盛岡市民生児童委員連絡協議会　副会長）

＜水先案内人＞
- 星　絹子　（北上南学童保育所　たけのこクラブ）
- 三浦　智恵　（盛岡市立北厨川児童センター）
- 佐藤　千秋　（花巻市矢沢第一学童クラブ）
- 宮城　房子　（盛岡市立上米内児童センター）

１．はじめに

子どもたちが何を思い、日々の生活に何を求めているのか‥‥。子どもたちの視点に立ち、私たちはそのことに気づけているだろうか。私たちが理想としている保育の現場は、子どもたちにとって本当に居場所としての役割を果たしているだろうか。色々な疑問や悩みを抱えながら、毎日を過ごしている現場の職員はたくさんいます。その一人ひとりが時には立ち止まり、振り返りながらその答えを探しているに違いないのです。私たちにできることは、もしかしたらもっとたくさんあるのではないだろうか。答えが見つからなくても、少しでも明日の活力につながってくれたらうれしいという思いで語り合う場にしました。



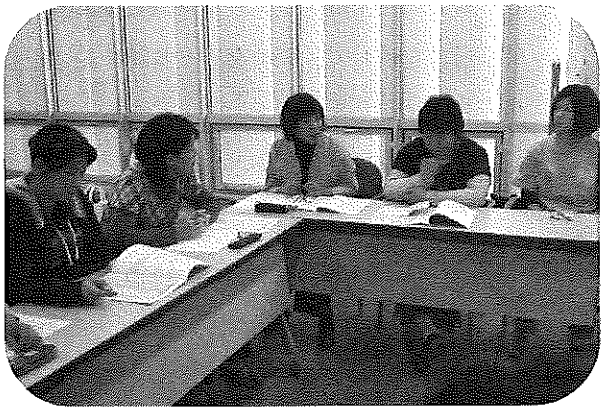
２．分科会の流れ

一人ひとりにたくさん発言をしてほしいということもあり、４つのグループに分かれてのグループセッションという設定にしました。自己紹介をしながら、疑問に思っていることや日頃の悩みを出し合い、１つずつ掘り下げていきました。

3．内　容

さまざまな形態、さまざまな職員体制の中、抱えていることは本当にたくさんあり、職員の方々の苦労や努力している姿が目に浮かびました。出された内容は以下のとおりです。

＊ けんかや荒れている子どもの対応
（子どものけんかに親が出てくる、思いやりが見られない、汚い言葉が飛び交っているなど）
＊ 目立たない子ども、気になる子どもの対応
＊ 大規模施設でのデメリットと今後の課題
＊ 安全面での工夫
＊ 保護者の対応
＊ 特別支援学級や発達障がいと思われる子どもの対応
＊ 土曜日や長期休みでの工夫
＊ 学校との連携
＊ 職員間の悩み



愛情不足やスキンシップ不足の子どももたくさんいて、思いやりに欠ける子どもが増えているように思いました。子どもの姿をよく見、褒める部分をみつけたり、言葉の大切さを教えたりしながら保育していくためには、職員間の情報共有が最も重要視したい事のひとつです。保護者との信頼関係作りには、働きながらの子育ての大変さをよく理解し、一緒に支援しているつもりなのに、なかなかうまくいかない事例などもありました。現場の職員でありながら、経営面の事も気にかけているという実情もありました。子ども一人ひとりが違うのでそれぞれの対応に苦労しているようでしたし、一日と同じ日がなく、その時々の対応や判断力が不可欠であることもよくわかりました。

4．まとめ

グループで話し合ったことを最後にそれぞれ全体で発表し、誰でもたくさんのつまずきや悩みがあることがわかりました。子どもたち一人ひとりが大切な存在であることに気づき、自分を大切にすること、他人も大切に思う気持ちが持てるようになってもらいたいと切に思います。ゲストの方々からいただいた助言も含め、私たちにできることとして以下のことがあげられました。

◎ 親や学校の先生方とは違う視点で見ること

◎ 自分で考え解決していく機会を与え、見守ること

◎ 遊びを通して、脳の発達や身体の発達を支援すること

◎ 親には寄り添う形での対応や支援をしていくこと

◎ 地域や学校などさまざまな機関とネットワークを結んで活動していくこと

働く親たちも職場やいろいろなところでストレスを抱えているかもしれない‥‥。問題児と言われる子どもたちは、本当は問題児ではなく、たくさんの問題を抱えていて大変なのかもしれない‥‥。私たちは、いろんな事に気づき、気づいた事を伝えていくこと、それを一緒に考え解決したいという姿勢を見せていくことなどを、心がけていきたいと思いました。

また、児童館や児童クラブは、本来の子どもたちの姿を見続けられる空間であり、私たち職員は、その空間で子どもたちの成長に関わる大切な役割を担っているということを忘れずに取り組んでいかなければならないと、改めて思いました。

（報告者：星　絹子）

第7分科会
「地域で育てる大きな未来
～自分を認められる子どもと大人でいるために～」

虐待防止

～参加者数　３１名～

＜ゲスト＞	・木村　泰雄さん	（盛岡市立北松園児童センター　館長）
＜助言者＞	・三上　邦彦さん	（岩手県立大学社会福祉学部　准教授）
＜水先案内人＞	・高橋　寿美子	（ＣＡＰ岩手）
	・平井　ふみ子	（ガールスカウト日本連盟岩手県支部）
	・恒川　かおり	（ＮＰＯ法人未来図書館）

１．はじめに

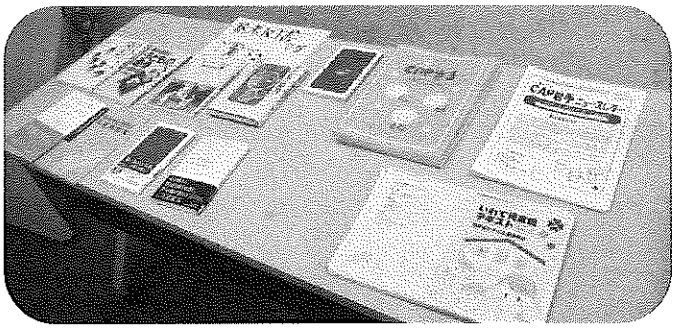
児童虐待や自殺など痛ましい事件にふれるたびに、全ての人が幸せでいてほしいと誰もが願うのではないでしょうか。昨年度のプレ大会では虐待を未然に防ぐ虐待防止ネットワークについて考えました。虐待をしてしまう大人自身が自分を大切に思えなかったり、自分を認められず苦しみや辛さの中でもがいている現状もあるという。そうした心の在り様は誰にでもあり得ることであり、子どもの育成の視点だけでなく大人も含めて生きているあらゆる場面につながる大切なことだと考えます。一人ひとりが幸せに生きていける未来を地域で育めたらとの想いを込めて、「自分を認められる子どもと大人でいるために」とテーマを設定いたしました。

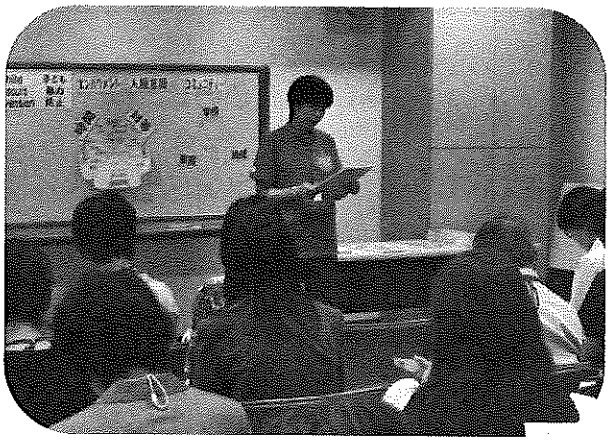
２．分科会の流れ

ご参加くださった様々な立場の方が、限られた時間の中、対等の立場で気持ち良く意義を感じ、各自、次の展開へとつなげていける会のあり方を目指しました。まずは人間バスケットで和やかな雰囲気づくりを行いました。その後参加者全員による自己紹介で分科会参加の想いをお話いただきいよいよ本題へ。ＣＡＰ岩手の高橋さん、児童館館長木村さんそれぞれ実際の動きの中からの貴重なお話と参加者の皆様からの意見交換もふまえ岩手県立大学の三上さんにコーディネートとご助言をいただきました。

最後に全員で「世界に一つだけの花」を歌い解散。志を同じくする全国の仲間の心がひとつに感じました。

資料の準備の点で皆様に大変なご迷惑をおかけしてしまいましたが、子どもの森の職員の皆様の機転と参加者の皆様、サポーターの学生さんをはじめとするかかわる全ての方のあたたかい思いやりで不測の事態からもテーマにつながる学びが一層深まったと大変感謝しております。





3．内　容

子どもへの暴力防止に取り組んでいらっしゃるＣＡＰ岩手の高橋さんから「子どもの虐待について」資料をもとに、対応する分野・種類・虐待と非行・世代間連鎖の分かれ目・相談対応件数・早期発見・早期対応・マルトリートメント（虐待より広い意味で、「おとなによる子どものこころとからだの成長を妨げる行為」のこと）などお話いただきました。

教育熱心と語られる家庭の子どもの犯罪や心中を含めれば３日に１人の割合で子どもが死亡している現状（厚労省）、報道事件の事例をもとに虐待との関連などの具体事例を交え「育ちの中で強烈に自己肯定感を失い『自分はダメな人間だ。』と自分を責め続けていると自分を大切にできなくなってしまう。だからこそ、虐待を受けることの辛さ、悲しさ、苦しみを分かって受け止めてあげる人が側にいることが大切であること。 数字を公表し始めてから虐待相談対応件数がこの１８年で４０倍に増えたが、虐待を認知されずに傷ついてきた子どもが親になっている今、親世代の苦悩も含めて地域の人々みんなで理解していきたい。」とのまとめに参加者は深く頷いていました。

次に「いわて児童館テキストＶｏ１．４　児童館と子ども虐待防止」（監修：岩手県立大学社会福祉学部 三上邦彦 准教授、企画制作：県立児童館いわて子どもの森）の執筆者であり虐待を受けた子どもの支援に多大な尽力を惜しまない木村さんから、資料とテキストに基づき「子どもの虐待とどう向かいあうか」子どもと話せる関係づくり・子どもと親を支えるネットワーク関係づくりについてお話いただきました。

腕に６０本以上のリストカットの傷のある子など心も体も傷ついていた子どもたちとの出会いが、子どもたちを支え続ける行動の信念となっている。虐待をされている子は親の期待にこたえたいと思う子が多い。虐待をされるのは自分が悪いから仕方ないと思ってしまう。

児童館は、子どもたちが遊びの中で自分自身を安心して出していける居場所でありたい。子どもは認めてもらえないと心をふさぐ。しかし一方で課題を抱える子どもにも興味・関心・やりたいものがある。きらりと光るものがある。こうした部分を見い出し認めていくことが大切なのである。

木村さんのお話に対して参加者からも「子どもの心に寄り添う事が虐待防止につながると思う」「早期発見は大人が普段心のアンテナを子どもに向けているかが問われる」などの意見や地域連携事例などの情報をいただきました。

４．まとめ　「人間には力がある」

～　ありのままの自分を認め豊かな未来へ　～

「このお手玉は９８歳のおばあちゃんからいただいたものです。」

三上さんの力強い言葉が響き渡る。「この方は孤児院で生活をしていた。小さい頃、虐待的な環境だったが、地域の方から愛情を受けたことが支えとなり、大人になってからは心豊かな人生を過ごされている。

人はどんなに傷ついていても人との出会いで回復する力がある。

私たちは子どもにどういう視点で関わっていくのかを問われている。子どもの命や健康を優先し丁寧に接していくことや安定して生活するために地域の協力が必要だということを多くが理解し、そしてその資源のひとつが児童館なのであり、虐待を早い段階で発見できる可能性を持っている。そのためには地域とのつながり、つまり形ではなく心からのネットワークが鍵となる。１人で抱え込まずに自分を大切に思える心の在り方を持てることこそが地域の大きな未来を育む力となっていくのである。」

事例でも様々紹介された胸が痛くなるような絶望の中にいても「人間には力があること」を信じ、子どもも大人もありのままの自分を認めることから豊かな未来へとつなげていけたらと願っています。

（報告者：恒川　かおり）

第8分科会
「ここがツボ！　児童館マネジメントを良くする方法を求めて」

～参加者数　３８名～

＜ゲスト＞	・高橋　雅裕さん	（札幌市中の島児童会館　館長）
	・波多野　里美さん	（京都市 社会福祉法人健光園 ももやま児童館 館長）
＜水先案内人＞	・吉成　信夫	（岩手県立児童館いわて子どもの森）
	・阿部　智衛子	（ＮＰＯ法人　矢巾ゆりかご）
	・齋藤　修	（盛岡大学短期大学部）

１．はじめに

昨年のプレ大会第８分科会では、多くの児童館が指定管理２期目を迎えている現状や課題について意見交換を行なった。また日頃、児童館・放課後児童クラブの運営に携わる皆さんの悩みや問題についても参加者の方々と一緒に考えた。今回の大会でも、夢も希望も意地もあるけれど、個人の頑張りだけでは越えられないこと、指定管理者制度への対応、行政との関係、地域の人との関係などを、自治体担当者、児童館館長や職員のみなさんと今ある児童館マネジメントを良くするツボを一緒に考えよう、という趣旨で開催した。

２．分科会の流れ

最初に、参加者から自己紹介を兼ね、何を求めて第８分科会に参加したのかを話していただいた。そしてゲストの高橋さんから館長としての運営や課題について、さらには指定管理者の選考に携わった経験からのお話を伺った。

その後、ゲストを中心に参加者と自由に意見交換を行った。

３．報告と意見交換

（A）高橋さん

札幌市中の島児童会館は「地域のこどもと大人、そして児童会館や各関係機関がふれあい、共に学び合うことで創り上げていくまちづくり―こどもの夢を広げる“あそび”と“ふれあい”の空間―」を目標に掲げて取り組んでいる。

（1）子どもの主体的活動の支援として，「こども運営委員会」による児童会館事業の実施

こども運営委員会による実行委員会を設置し、企画から当日の運営までを行う。

（2）まちづくり活動への参画機会の導入

子ども自身が地域を知り、その一員であることを認識していく活動への取り組みで、地域施設や町内会の行事などへ参加していく。

（3）子どもたち同士の信頼関係の構築

子どもたちは遊びや様々な体験を中心とした集団生活を通して、主体性や自主性を育んでいく。この自主性、主体性を尊重した「子どもの育ち」の環境を、地域・保護者が一体となって作り上げるために、児童会館も地域の施設として一翼を担う。

（B）意見交換

ゲストの２人のお話から３つの課題、（1）指定管理者制度（2）人材育成（3）地域との連携のあり方が指摘された。指定管理者制度についてはその導入に関わった参加者から、第１に意欲に乏しい上司よりは自分たち自身の手によって子どもを育成できる、第２に地域にあった児童館の運用ができる、第３に自分たちの自由裁量で安定的に収入増を図る取り組みができ、委託費用と合わせて職員の雇用の安定と生活給を支給できるといったメリットが指摘された。

一方、他の参加者からは指定管理者の選考にあたっては提出された資料を十分に検討する時間がなく、また会計、労務管理、事業内容など多岐にわたるため選定者自身も内容を十分に理解することが困難である。地域における児童館の活動方針が確立していないと選考基準が不明瞭となり、かつ過去の実績が考慮されないケースが多い。さらに委託期間は３年のケースが多いため、継続性がおろそかにされ長期計画を立てにくく雇用も不安定になる。

その結果、職員の専門性を高めるための研修などにお金や時間をかけられないなどの問題点が指摘された。行政との対応において指定管理者選考過程や予算配分の不明瞭さ、また窓口の担当者が数年で移動になるために、再度最初から説明しなければならず、許認可などに時間を要するなど非常に非効率であるとの指摘がされた。

4．まとめ

指定管理者の選考にあたっては、限られた時間と児童館運営に詳しくない選定者が加わることがあるために、プレゼンテーション力が大きな影響を与える。また行政から数値での説明を求められることがあり、管理者はこれまで自分たちが行ってきたことを検証し、それに対応できる力を持たなければならない。多くの自治体の委託期間は３年間であるが、長期的展望を持って事業を継続的に行うためには５年から８年間の委託期間が必要である。さらに指定管理者制度は、子どもの安全や居場所、育ちを目的とする児童館にはなじまず、見直しも必要ではないかという指摘もされた。

児童館が地域との連携を深めるためには、まず職員自身が地域を知ることが必要である。児童館を利用している親子だけでなく、他の住民、お店、会社、民生委員や議員などの役員や施設・機関などを把握することによって相互交流が深まる。児童館も街を構成する一員として、お互いの行事などに積極的に関わることによって街づくりに参画し、その結果住民の理解を得、その支えを背景に、行政などとの交渉においても打開の道が開けてくるなどの提言がされた。

（報告者：齋藤　修）

第9分科会

「子どもの安全・安心とリスクマネジメント」
～ひとが創りあう安全、ひとがはぐく(育)む安心～

～参加者数　３３名～

＜ゲスト＞　・千葉　雅人さん
（全国児童厚生員研究協議会　会長 / 中野区昭和児童館　主査）

＜水先案内人＞　・吉田　敏明　（遠野市宮守児童館）
・横欠　真人　（盛岡市社会福祉事業団）
・大森　紀代美（盛岡生活文化研究室）
・荒川　加代子（盛岡市母親クラブ連絡協議会）

１．分科会の流れ

①安全・安心について、日ごろ感じていることを来場者にポストイットに書いてもらう。
②講演　講師：千葉　雅人　「施設の安全管理と子どもへの安全指導」
③事例発表

２．内　容

講演　『施設の安全管理と子どもへの安全指導』　（千葉　雅人さんより）

「児童館における安全マニュアルハンドブック」（平成１７年３月児童健全推進育成財団発行）は現場の状況に則して作ったものなので、参考にしてほしい。マニュアルはその場で広げるのではなく、事前に学習して読み込んでおくことが大切である。

「 質問：リスクとハザードの違いは？」 ⇒ 「ハザード」とは自然災害的危機を指しているのに対し、それ以外の身近な行動を起こした時に起こりうることを「リスク」という。

私たちの施設にとって何がリスクなのかを正しく把握し、見つけたものにリスクの優先順位をつけ、順位の高いものから対策を立てていくというのがリスクマネジメントである。世の中の大前提として「児童館・児童クラブは安全な施設」と見られている。そのため、そこで事故や怪我が起きた時、程度が大きく見られてしまう傾向がある。だからと言って、必要以上に制約をかけてしまうと子どもたちの健全な発達や克服して乗り越える力を身に付けるという目標に制約をかけてしまうことになる。そのバランスをうまく取りながら運営していくのが、私たち職員の力量。『施設の安全管理と子どもへの安全指導』において大切なことは、（A）起きなくてもいい事故は起きないようにしておく。（B）子ども自身に自分で身を守る力を身に付けさせる。（C）災害への対策を日ごろから考えておく。（D）子どもを標的にした犯罪への対策も考えておく。このようなことが大切。

（A）起きなくてもよい事故は起きないようにしておく

事故の定義は、擦り傷や打撲など日常の障害全てを含む概念である。

①リスク発見のポイントで一番大切なのは整理整頓。仕事の効率化のためにもこれは大切である。
②普段の安全点検において身近なところでは清掃がよい機会である。安全点検という気持ちを込めて行う必要がある。

③普段の点検で気づきにくいところは施設のチェックリストを作り、年に１・２回点検をしたほうがよい。専門家など第三者にアドバイスをもらえるようなチャンスを作り、役に立つチェックリストを作成。毎年決まった日に点検し、館長の決裁をもらうなど、義務化することが大切。

④施設に対する慣れが出てくるので、「違う目」の活用が大切となる。人事異動や他の施設から訪問者がいる時をチャンスと捉え、施設のチェックをしてもらう。

⑤リスクを発見したら全職員で情報を共有し、対策を取っていくように進めていく。事故のニュースなどリスク発見のチャンスとして捉える。

⑥なぜこの怪我が起きたかの記録を取っておくと、振り返る手立てになるのでリスクマネジメントには有効である。

⑦ヒヤリ・ハット事例（事故には至らなかったがそのまま進行していたら大変なことになったかもしれない事例）が起きた時は、ヒヤリ・ハットシートに記録し、情報を共有し、対策を立てる。

（B）子どもへの安全指導

自分で考えて行動できる人間になってもらう。子どもの主体性や自主性を育てるためには、どのような働きかけをすればよいか探っていく必要がある。

①大人が先回りをせず、施設のルール作りは子どもと一緒に行う。子どもたちで作ったルールは守るようになる。

②意見表明活動を通して、大人や親に対して言いたいことを自分の言葉で伝える、自分が考えていることをみんなの前で表明する習慣をつける。考えてからしゃべるという回路も作られる。

③館内の安全マップ作りをすることにより、身の回りの危険について意識を持ってもらう。

（C）自然災害に対する対策　（自然災害に対する対策は各自治体で取り組んでいると思うので割愛）

（D）犯罪への対策

リスクマネジメントの専門家は、日本社会でも子どもの連れ去りが増えてくると予想している。

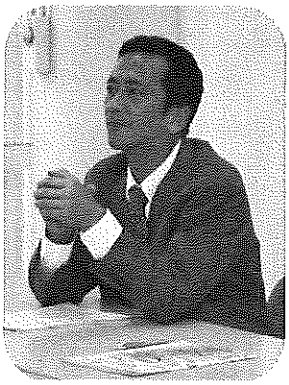
①防災上は出入り口が多いほうが安全とされているが、防犯上は入口が少ないほうが安全とされるので、内鍵などを利用しバランスを取ってほしい。

②玄関に利用のルールを表示し、誰にでも説明できるようにしておく。

③出入り口には必ず大人の目があるようにしておく。

④不審者に限らず入口を入って来た人に挨拶をする。「挨拶」というプラスのアプローチをすることによってマイナスの行動をしにくくさせる効果がある。

⑤不法侵入者が入ってきた場合を想定し、対策を立てておく。人は恐怖状況に陥ると、判断能力を５０パーセントも失う。



事例発表（それぞれの児童館等で感じている問題点、および対策）

＜１＞駐車場の一部を館庭として使わなければならないが、使用上のルールを作って活動している。

＜２＞公民館と児童館を併設。駐車場にポールを立て、なんとか遊べるスペースを確保している。子どもの利用者に対して指導員（週３０時間の指導員と１日３時間労務員が指導スタッフ）が少ない。

＜３＞遊戯室（小さな体育館）でボール遊びなどをして遊んでいる。館庭は周辺が民家に囲まれているので遊べない。路上駐車が多いので、館庭の一部を駐車場にすることを考えている。

＜４＞遊戯室では、曜日により遊ぶ種目を決めて活動している。１日中屋内での活動になってしまう。

＜５＞遊戯室を独占して使っている状態があり、遊びの予約制度を取り入れた。曜日を決めて高学年も使えるように相談して決める。遊園が狭く遊園でのボール禁止。

＜６＞遊戯室でのボール遊びは曜日を決めて行う。自由に活動し、禁止事項は最低限とする。しかし、今年になり、人数が増えたことによって思わぬ事故が発生している。

＜７＞新１年生で入ってきた時、「このようなことはしません」というルールを自分で考え、紙に書いてもらい、壁に貼り出している。

＜８＞老人福祉センター併設で玄関のスロープの手すりを鉄棒代わりにして遊び、怪我をする。

＜９＞ガラスで囲まれた環境でボール遊びなども危険なので、ガラス飛散防止シートを貼ることにより事故を未然に防いでいる。また、見通しの悪い曲がりくねった道の多い地域なので、ハロウィーンの仮装行列をしながら安全協力を要請するチラシを配っている。

＜10＞ガラスをプラスチックにする。

⇒　**講師助言**

①水だけで上手に貼れるガラスの飛散防止フィルムを貼る。

②フィルムで包んでいる防飛型蛍光管があるので、それを使用して安全性を高めることができる。

③家具の転倒防止処置を必ず行う。

④ドアの指はさみ防止処置を行う。

＜11＞**インフルエンザ対策**として玄関に消毒液を準備しておく。自分用の手ふきタオルを用意させる。

⇒　**講師助言**　①**インフルエンザ対応**としては、学校に準じた対応を。

②中野区の学童クラブでは発症の前日と当日に接触した児童、職員は経過を観察する。（出勤しても良い。）具合が悪い場合は直ちに申し出ることになっている。

＜12＞職員が少ない時や要支援児童が多く利用する時は、子どもたちを集め、場所を制限することを説明している。また、帰る時の寄り道対策としては、信頼関係を築くために門まで見送りに出ている。

＜13＞長期休みに入る前に懇談会を行っている。お母さんたちを対象にしてビデオや写真を使い、施設の状態や状況を説明している。

＜14＞行政の組織そのものがとても複雑であり、存続の問題もある。

⇒　**柳澤専門官のアドバイス**　児童館等の最低基準を自治体へ委任して自由にという動きがある。しかし、「児童館の最低基準を無くしてほしい」という声は聞いたことがない。また、子どもの放課後活動場所について、児童館や児童クラブ、放課後子ども教室などなどいろいろあって分かりにくいので一つにしては？という意見もある。

こんな時こそ、児童館の専門性をアピールして活動展開していただきたい。

児童館の事業や活動は地域、施設によって違いがあるが、それぞれの地域の特色を有効に活用しながら、展開していただきたい。子育て支援の対象は０歳から１８歳であり、中学生、高校生を育成・支援することも児童館にとって大切な仕事である。

厚生労働省の柳澤専門官にも細かな説明をいただきました。

３．まとめ

基本は、何もないときに何をしておくか！　これがリスクマネジメントである。

（報告者：吉田　敏明）

あそびの屋台!

子どもも オトナも あつまれ!!　プレイベント

あそびにコンビニ

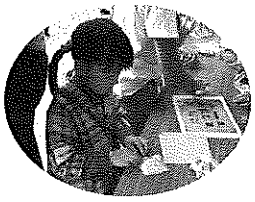
全国の児童館・児童クラブ等のスタッフの皆さんが、“イチ押しあそび”を持って
「盛岡駅前・滝の広場」に大集合！

●あそびにコンビニ　出店リスト

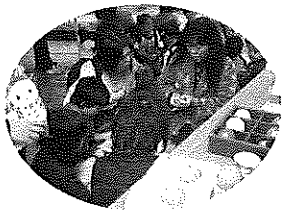
	テント出店団体名	内容
1	青森県　八戸市高岩児童館	折り紙「こま」
2	栃木県　子ども総合科学館	工作「宇都宮餃子・包（パオ）」
3	栃木県　高根沢町児童館「きのこもり」	工作「コッコちゃん」
4	東京都　江東区児童館	ゲーム「Kをねらえ～ko to ku～」
5	東京都　ただじゅん企画・表現あそびの風光舎	工作「ポンポン太鼓をつくろう」 パフォーマンス「お囃子で遊ぼう」
6	石川県　いしかわ子ども交流センター	工作「フィルムケースを使った笛づくり」
7	滋賀県　児童館連絡協議会	ゲーム「ふりふり１５秒」「ホールインワン」 「びわ湖の生き物を探せ！」
8	広島県　広島市亀山南児童館	ピカピカのドロだんご
9	広島県　広島市舟入児童館	パフォーマンス「にちようび（ダンス）」
10	沖縄県　沖縄市児童館	工作「まつぼっくりシーサー」
11	岩手県　洋野町児童館・児童クラブ	ゲーム「とばしてあそぼう」
12	岩手県　岩手グッド・トイ委員会	工作「パタパタ人形」ほか
13	岩手県　盛岡カレッジ・オブ・ビジネス	工作「バルーンアート」
14	岩手県　矢巾町徳田児童館	工作「数珠玉　ブレスレット」
15	岩手県　県立児童館いわて子どもの森	PL（プレーリーダー）のんき王子の“こくばんや”参上！
16	岩手県　盛岡市児童センター連合チーム	工作「ミラクルボールでくるくるトーン」
17	岩手県　盛岡市レクリエーション協会	パフォーマンス「バンブーダンス」他

	パフォーマンス ゲスト	内容
1	ＪＲ東日本「新幹線トレインジャー」	クイズ大会　他
2	underpath!（アンダーパス）	いわてみんなのうた「たらりら」　他

バンブーダンス


折り紙で“こま”

“こくばんや”で絵かき歌


ピカピカのどろだんご

びわ湖の生き物を探せ！

北は青森、南は沖縄、全国から１７団体の出店があった「あそびにコンビニ」は、天候にも恵まれて、約２０００人の親子連れや地域のみなさんに集まっていただきました。

大会前の２週間は、天気予報とにらめっこ。

予報が変わるたびに、スタッフ同士で「降水確率が上がったぁ！」「“曇り”から“晴れ”になった！」などと一喜一憂していました。

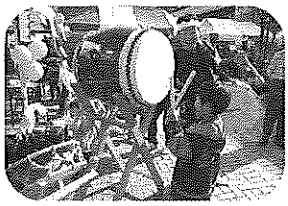
みんなの、強～い念力が天に通じたのですね。

晴れ渡った秋空の下で、ご当地工作あり、パフォーマンスあり、あやしい！？リヤカーが登場したりと、おもいきり楽しむことができました。

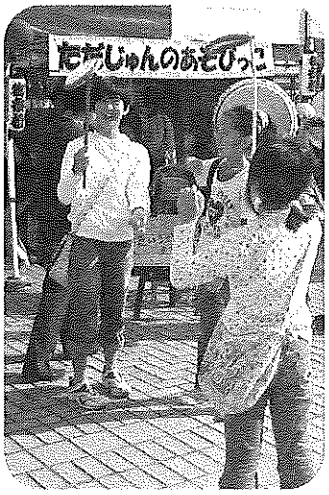
スナップショット

ようこそ、岩手におでんした。
今日はみんなで楽しみましょう！

全国から集まった児童厚生員は、
やっぱりパワフル！
Let's dancing♪



ただじゅんの
あそびっこ
開店！



牛乳パックで作る
“ミラクルボール”

植物の「数珠玉」をつなげて、
ブレスレットをつくろう！

新幹線「トレインジャー」と、
underpath!の「♪たらりら」は大人気！

カラフルなトゲトゲが
かわいい、ご当地工作
“まつぼっくりシーサー”

あやしげなリヤカーを引き、
「こくばんや」が参上！

（報告者：長﨑　由紀）

交流会 in いわて

盛岡駅に隣接する「メトロポリタン盛岡」を会場に開催された交流会には、約３００名のみなさんに参加していただきました。

岩手といえば「冷麺・じゃじゃ麺・わんこそば」の三大麺と、日本一の太鼓パレードである「さんさ踊り」です。
全国から参加していただいた皆さんに、たっぷりと岩手を堪能していただけるように、たくさんの企画を用意しました。
会場内には「さんさ太鼓」の音が響き渡り、「わんこそば大会」は皆さんの大きな笑い声と声援に包まれ、たくさんの笑顔があふれていました。

みんなで記念撮影☆　ハイ・チーズ！

謎のカッパ集団による「遠野まぬけ節」に吸い寄せられる参加者…
カッパによる、見えないチカラがはたらいている…らしい。
かけ声とともに、異様なまでの熱気に包まれる会場内。

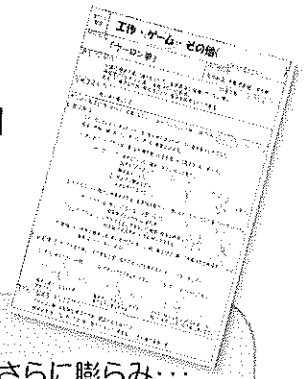
謎の！？カッパ集団現る！！

次期開催県である滋賀県のみなさん！
そして、滋賀県のキャラクター「キャッフィー」が、特別出演！

（報告者：長﨑　由紀）

全国大会初の試み!!

「うちの、いちおしあそび＆行事レシピ集」誕生ウラ話!!



【誕生のきっかけ】

プレ大会準備の時、担当者の「他の児童館では、どんな活動をしているのかほとんど分からない。大会を機に、普段子どもたちと楽しんでいることを、皆さんから教えてもらったらどうだろう？」というひと言から始まりました。

【ステップアップ】

本大会に向け、編集者の想いはさらに膨らみ･･･。「せっかくの全国大会。遊び・活動を知ることだけでなくレシピ集をきっかけに、全国の仲間たちがつながってほしい！ そしてレシピ集が、児童厚生員と子ども･親･地域の人たちがつながるための小さな種になってくれたら･･･」と。

夢がどんどん広がっていきました。

【手作りで･･･】

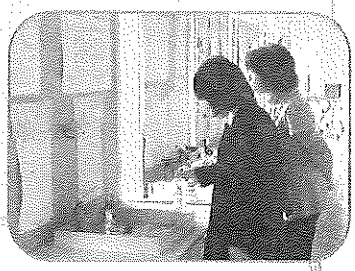
レシピ集のイメージは、「みんなの笑顔が見えるような、楽しいレシピ集に！」でした。そのため、表紙･本誌内の手描きのイラストはもちろん、『たらりら』という盛岡にちなんだ歌に振り付けをしてダンスを作ることまで、すべて第５分科会メンバーが、持てる力を出し合って、悩みながらも楽しんで作りました。『たらりら』の歌詞を、皆さんの地域に合わせて作り変えても踊りは同じ。いつか他の地域の方と『ご当地・たらりら』で一緒に踊れたら･･･。夢はさらに広がります！

【苦戦だけ･･･？】

レシピ集は、皆さんからの遊びの提供があってこそ、作ることができるもの。しかしなかなか集まらず、焦りが･･･。そんな時、第５分科会だけではなく様々な方々の協力のお陰で、北海道･名古屋etc…の皆さんが力を貸してくださり、直接電話でレシピ以外の事までお話させていただきました。この時、改めて**『人とのつながり』**の大切さを感じました。

【展示も！】

大会当日はレシピ集の中から、実際の工作･行事報告（６１種類）の展示も行いました。約１６０人の来場者の方々の中には、「レシピ集と実物を合わせて見る事ができたので、とても分かりやすかった」とのご意見が。また、偶然会場に来た一般の親子の方にも、手作りおもちゃで楽しいひとときを過ごしていただけたようです。



【そして･･･】

レシピ集は、１５都道県約７０施設の皆さんのおかげで、あそび９６種類、行事２５種類、１７０ページにも及ぶ大作となりました。お忙しい中ご協力いただき、本当にありがとうございました。大会後、レシピ集を手にした方々から、「さっそく子どもたちと作ってみた。すぐに使えるものばかりでいい。」「うちの児童館の子どもに合うように、ゲームをアレンジしました。」など、嬉しいお言葉をいただいております。

私たちの思い描いた夢が、少しずつ実現してきたようです。このレシピ集をきっかけに、たくさんの笑顔が日本中に広がっていくことを担当者一同願っています。

（報告者：佐藤　裕規子）

閉会あいさつ（総括）

第９回全国児童館・児童クラブ岩手大会　実行委員長
吉成　信夫

え一、本当にあっという間の２日間でしたね。あまりにも時間が経つのがはやくて、振り返りができずにいます。昨日は宮澤賢治の世界からスタート。皆さん、話を聞いていることがものすごく多かったですよね。なかなか発言する機会もなく、いろんなことが渦巻いていた昨日だったと思います。

今日の分科会の時間も短いものでした。私は昨日のトークセッションを引き継ぐ形で「児童館のマネジメント、児童館のこれから！」ということで、第８分科会に参加をしました。その中である児童館の館長さんが、私たちの思いを一言に集約してくれたような言葉を言って下さいました。それは、「児童館とはいったいどういう場所なのか？」ということなんですね。彼女が言っていたのは、やりたいこと、したいことをそれぞれの子どもたちが形にしていくのが児童館、というふうにおっしゃっていました。明日はイベントがあって、だから今日はこれをやるのよ、とその日のプログラムが決まっていても、子どもはわからないですよね？　全然違うことを言うかもしれない。やっぱり今日はこっちをやりたいよね！と（子どもたちが）言った時に、ん～んとうなりながらも、やはりその子どもたちに寄り添えるか寄り添えないか。物理的な問題ももちろんありますけれども、気持ちの上ではそこに寄り添うというのが、昨日から話をしてきた皆さんどの方にお伺いしても児童館の役割はその辺にあるのではないか、と思っております。

とにかく沖縄に負けないで私たちなりのやり方で秘めた闘志で、みんなで盛り上げていきましょう、と実行委員や企画運営委員のみなさん、ボランティアの人たちとやってきた２日間ですけれども、そういう大会になったのではないか、と私は思っております。　（拍手）　ありがとうございます。

昨日の（夜の）交流会も、もうほとんど打ち上げのようでしたね。大会がすべて終わってしまったようにも感じましたけれど、そうではない！　今日の第８分科会から、次の滋賀の大会につないでいく１つのメッセージが出たように私は思っています（総員ではなく個人的見解ですが‥‥）。

それは先程の話と、もう１つ児童福祉法の話ですね。児童福祉法がこれから変わっていく可能性があります。４０条の「児童館の役割、機能」について、どういう形で変えていくのか、変わっていくのか。来年の滋賀の大会では、その話を具体的に現場にいる私たちがどう考えるのか、どうしたいのか、まとめていく作業になると思います。それをつなぐために、来年、滋賀でまたみなさんとお目にかかりたいと思っています。

昨日は音楽と宮澤賢治の詩で始まり、今日の最後もまた音楽で終わりますけれども、そういう形で余韻をもって今日の大会を終わりたいと思います。

参加してくれた皆さま、スタッフの皆さん、本当にありがとうございました。

記念品 贈呈

次期開催　滋賀県へ引き継ぎセレモニー あいさつ

第１０回全国児童館・児童クラブびわ湖大会　実行委員長
吉村　潤子

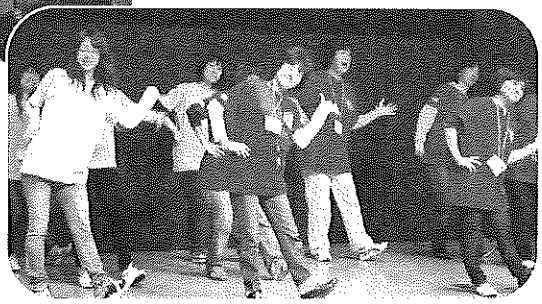
みなさん、この２日間本当にたくさんのことを学び、そして楽しい大会でしたね。昨日のあそびにコンビニをはじめ、開会式、オープニング、トークセッション、現場からのメッセージ、そして夜の楽しい交流会、今日の白熱した分科会と感動の連続でした。この素晴らしい心に残る大会を開催していただきました岩手大会のみなさん、本当にありがとうございました。お疲れ様でした。

実行委員長の吉成様をはじめ、岩手県社会福祉協議会 児童館部会の皆さま、県内の児童厚生員の方々、その他多くの関係者の方々、本当に素晴らしい大会で心に残るたくさんのご示唆いただいたことを滋賀にも引き継ぎまして、そして先程、大きな宿題をいただきました。そのことも引き継ぎまして、来年の滋賀県大会も有意義なものにしたいと思います。とても小さな組織ですが頑張りたいと思いますので、よろしくご支援の程お願い致します。

テーマは、『でっかいびわ湖に集え！子どもも大人も輝こう！つなげよう！人・心・未来』です。児童館で出会い、児童館で何を大事にしていくのか、子どもたちの心をどんなものに育てていきたいのか、児童館の未来をどのようにしていきたいのか、ということをしっかりと掘り下げられるような大会にしたいと思っております。皆さまの協力が全てでございますので、ぜひ来年滋賀にもお越し下さい。日本一でっかい琵琶湖に集って、子どもも大人も輝けるような大会にしたいと思っています。皆さん、よろしくお願いします。皆さん、お待ちしています。

清心さん＆星ゆきこさんとともに感動のフォナーレ
～『ココロの風』をみんなで大合唱～

岩手女子高校 JRC 部のみなさんも一緒に！



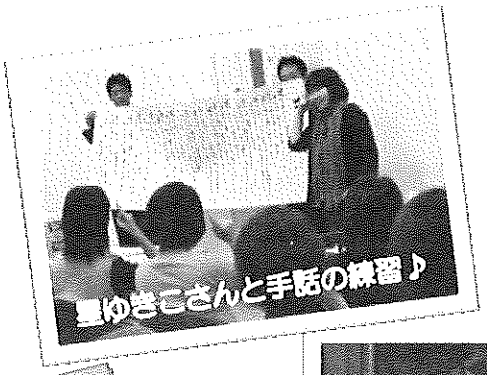
閉会後も「たらりら♪」を踊って盛り上がった第5分科会のメンバー

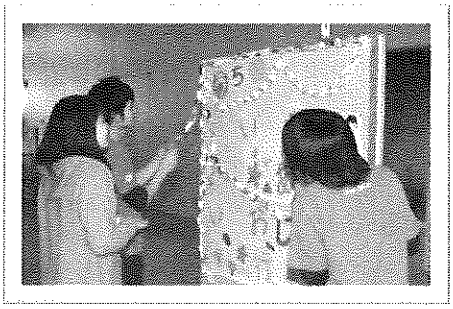
◆◇◆◇◆◇参加者の声～大会アンケートより～◆◇◆◇◆◇

◆オープニングからエンディングまで、たくさんの感動をいただいた。
◆全国各地に魅力的なスタッフがいることを知ることができ、励みになった。
◆心あったかい、やる気マンマンの大会・児童厚生員に出会え、その中に自分が居ることが最高で、ますます全国大会が好きになった。
◆スタッフも元気で、岩手県ならではのユニークな大会になっていたと思う。
◆会場内のどの方に声を掛けても、自分の倍の元気を返してもらえる大会だったと思う。
◆自費で参加したが、それだけの意義があり、満足感でいっぱい。
◆想いを伝えていくのが自分の役割であると感じた、一歩一歩歩んでいきたい。
◆子どもたちの為に何ができるのか、もっと前向きにアクションを起こしていきたいと思った。
◆行政職員として現場の支援をしつつ、子どものための環境づくりを進めていきたい。「枠」にとらわれず柔軟に。
◆学童保育とは形態や生活状況に違いはあるものの、子どもを預かる者としての思いは同じだと実感した。
◆子どもたちが本音を出す「児童館」だからこそ、子どもの行動の裏に潜む子どもの心を見抜ける指導員になりたいと思った。
◆自分たちがやっていることの良さを再確認し、また問題点も発見できたように感じた。
◆虐待はあってはいけないこと。地域を始め、全体でネットワークをしっかりし、防止していきたいと思う。
◆岩手県の児童厚生員の横のつながりの強さを感じた。スタッフ一人ひとりが輝いていた！
◆見せ場がたくさんあり、子どもたちの参加もあって、また地域の特性を生かした大会だったと思う。見たいもの、聞きたいものを見聞できた喜びは大きい。
◆オープニングでの子どもたちの澄んだストレートな瞳とバイオリンの音色に涙した。
◆歓迎パフォーマンスでの小学生の民話語り、岩手の方言がとても良かった。岩手には人をやさしくする言葉が沢山あると知りとても感動。この文化を絶やすことなく後世に伝えていって欲しい。
◆子どもたちのパフォーマンスはどれも素晴らしく感動した。欲を言えば、普段の児童館での子どもたちの和気あいあいとしたそんな様子も見てみたいなぁと思った。
◆トークセッションでの「まとめません」という、聞く側が広げるというスタンスは行政にはなく、自由で各々が考えを膨らませられ最高だった。
◆子ども観に対する原点を大事にしていくことで、問題解決への糸口となると思えた。
◆行政に異動になり忙しさから忘れていた気持ちを思い出すことができた。感謝！
◆あそびにコンビニに年配のお祖母ちゃんが楽しそうに参加していたのがとても嬉しく、いい思い出になった。
◆夜の交流会では、わんこそば競争やカッパ踊り（まぬけ節）等、その土地ならではのおもてなしをしていただき、楽しかった。
◆分科会はとても楽しく学ばせてもらったが、あっという間に時間が過ぎ、質問する時間や情報を共有できずに残念だった。
◆分科会では、意見交流の時間や水先案内人の方を囲んでの相談時間をもっとたくさんとって欲しい。
◆第３分科会では、中高生のすばらしい心に触れ、感動した。
◆閉会式で歌われた『ココロの風』。気がつけばそのメロディーを口ずさんでいる自分が居て感動がよみがえり、余韻が冷めない。いい歌に出会ったと思う。
◆スタッフのみなさんのＴシャツがステキだったので、参加者も色違いで購入できたらよかったなぁ。(過去の大会では購入できた時も)
◆休憩時間に施設の方々のコーヒー販売や手づくりお菓子等のお土産があったのは良かった。
◆参加者のみなさんともっと交流を深めたい。さらに交流を図れる場や企画があればいいかな。
◆大人だけではなく、子どもも一緒に楽しんだり感動したり同じ気持ちを味わうイベントがあれば楽しいと思う。
◆仕事の悩みや楽しいこと、参考にできる情報などが書き込みできて、全国の仲間が励まし助け合い、切磋琢磨することのできるサイトがあると良いと思う。

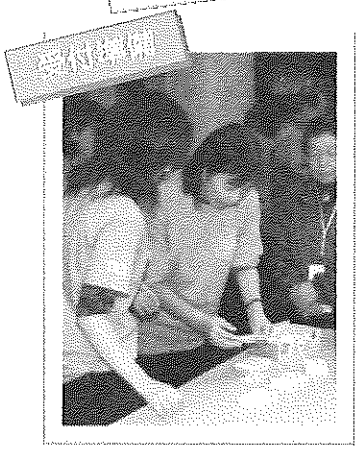
たくさんのメッセージ、ありがとうございました。

◇◆◇◆◇◆あんなこと こんなこと◇◆◇◆◇◆

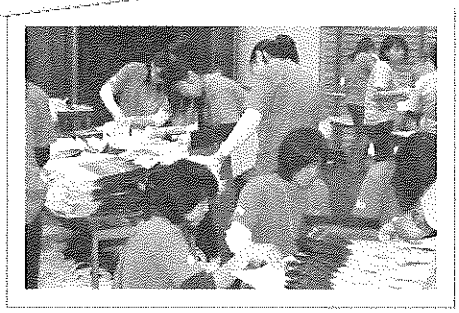




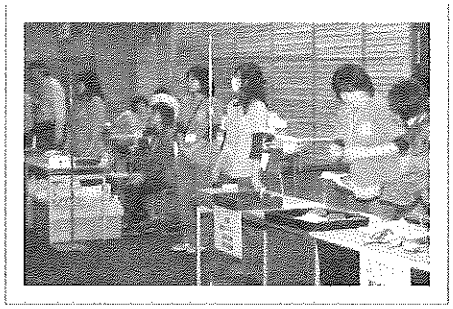
レシピ展示の準備！
大学生も大活躍！



全国から集まる参加者の数を実感！



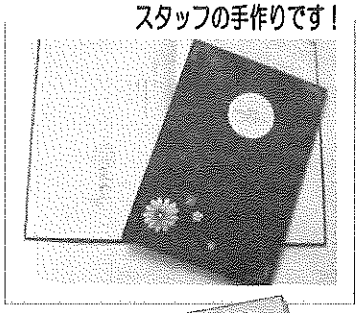
いよいよ準備作業も大詰め



お迎えの準備はOKよ！

竹下さんがお使いになった台本♪
スタッフの手作りです！

岩手の想いを滋賀へ
～メッセージフラッグを贈呈～



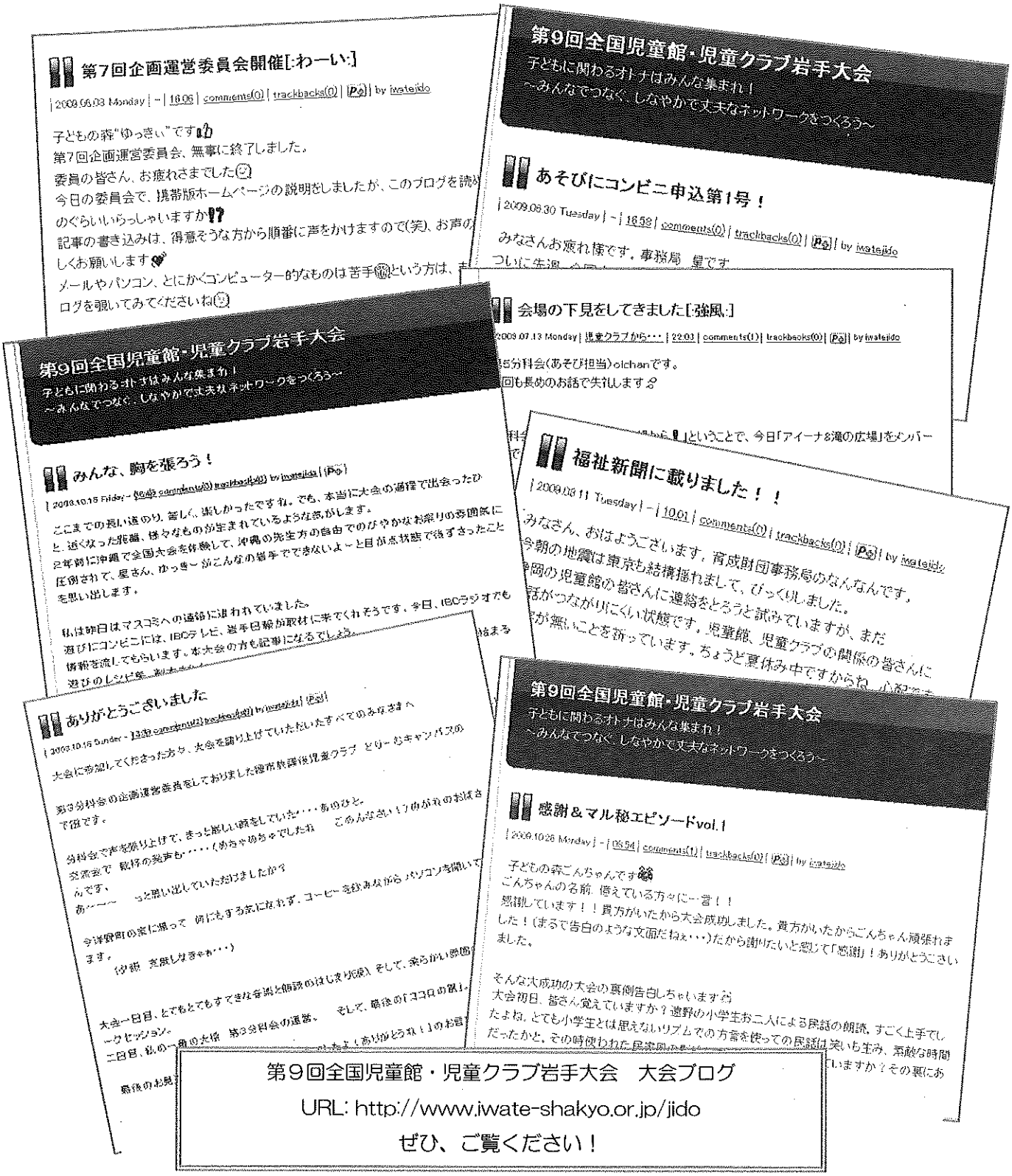
あそびにコンビニチームもお疲れさまでした

大会を振り返り、あふれる充実感

◆◇◆◇◆◇◆◇大会ブログの報告◇◆◇◆◇◆◇◆◇

岩手大会に向けての準備状況や企画運営委員の想いなどを、ブログにて紹介してきました。

大会後も、大会の感想やスタッフの裏話などなど‥‥。コメントの書き込みもたくさんいただき、全国の皆さんとつながることができました。その一部をご紹介します！



第９回全国児童館・児童クラブ岩手大会　大会ブログ

URL: http://www.iwate-shakyo.or.jp/jido

ぜひ、ご覧ください！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

平成 21 年 10 月 18 日（日）
岩手日報に掲載！

児童館の将来像探る

盛岡で大会 全国の職員ら700人参加

第9回全国児童館・児童クラブ岩手大会（全国児童厚生員研究協議会など主催）は17日、2日間の日程で盛岡市盛岡駅西通1丁目の森の青成宿主館長がのいわて県民情報交流センター（アイーナ）で始まった。全国の児童館職員ら約700人が参加。地域の子育て支援の中核施設として児童クラブ岩手大会の児童館の在り方を探る。

17日の開会式では県立児童館いわて子どもの森の青成宿主館長が「児童館や放課後児童クラブが将来どんな形で始まった。全国の児童館職員ら約700人が参加。地域の子育て支援の中核施設として児童クラブ岩手大会の児童館の在り方を探る。

17日の開会式では県立児童館いわて子どもの森の青成宿主館長が「児童館や放課後児童クラブが将来どんな形で始まった。全国の児童館職員ら約700人が参加。地域の子育て支援の中核施設として児童クラブ岩手大会の児童館の在り方を探る。

17日の開会式では県立児童館いわて子どもの森の青成宿主館長が「児童館や放課後児童クラブが将来どんな形で始まった。全国の児童館職員ら約700人が参加。地域の子育て支援の中核施設として児童クラブ岩手大会の児童館の在り方を探る。

17日の開会式では県立児童館いわて子どもの森の青成宿主館長が「児童館や放課後児童クラブが将来どんな形で始まった。全国の児童館職員ら約700人が参加。地域の子育て支援の中核施設として児童クラブ岩手大会の児童館の在り方を探る。

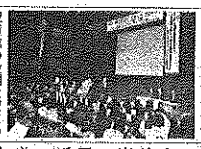
17日の開会式では県立児童館いわて子どもの森の青成宿主館長が「児童館や放課後児童クラブが将来どんな形で始まった。全国の児童館職員ら約700人が参加。地域の子育て支援の中核施設として児童クラブ岩手大会の児童館の在り方を探る。

17日の開会式では県立児童館いわて子どもの森の青成宿主館長が「児童館や放課後児童クラブが将来どんな形で始まった。全国の児童館職員ら約700人が参加。地域の子育て支援の中核施設として児童クラブ岩手大会の児童館の在り方を探る。

17日の開会式では県立児童館いわて子どもの森の青成宿主館長が「児童館や放課後児童クラブが将来どんな形で始まった。全国の児童館職員ら約700人が参加。地域の子育て支援の中核施設として児童クラブ岩手大会の児童館の在り方を探る。

17日の開会式では県立児童館いわて子どもの森の青成宿主館長が「児童館や放課後児童クラブが将来どんな形で始まった。全国の児童館職員ら約700人が参加。地域の子育て支援の中核施設として児童クラブ岩手大会の児童館の在り方を探る。

17日の開会式では県立児童館いわて子どもの森の青成宿主館長が「児童館や放課後児童クラブが将来どんな形で始まった。全国の児童館職員ら約700人が参加。地域の子育て支援の中核施設として児童クラブ岩手大会の児童館の在り方を探る。



児童館の役割などについて意見交換した全国児童館・児童クラブ岩手大会

財団法人 児童健全育成推進財団 発行『じどうかん』に特集！　平成 21 年 12 月発行

じどうかん 2009 No.55

第9回全国児童館・児童クラブ岩手大会

児童健全育成推進財団

第9回全国児童館・児童クラブ岩手大会　実行委員会実行委員

No.	所　属	役　職	氏　名	備　考
1	岩手県社会福祉協議会　児童館部会	部会長	吉 成 信 夫	実行委員長
2	盛岡市母親クラブ連絡協議会	会長	鎌 田 正 子	副実行委員長
3	岩手県社会福祉協議会　児童館部会	副部会長	立 花 秀 美	副実行委員長
4	全国児童厚生員研究協議会	会長	千 葉 雅 人	
5	財団法人児童健全育成推進財団	常務理事/事務局長	鈴 木 一 光	
6	岩手県保健福祉部児童家庭課	総括課長	佐々木比呂志	
7	岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課	総括課長	大 月 光 康	
8	岩手県立大学社会福祉学部福祉臨床学科	准教授	山 本 克 彦	
9	盛岡市保健福祉部児童福祉課	参事兼児童福祉課長	東 藤 郁 夫	
10	盛岡市社会福祉協議会	事務局長	瀧 野 常 實	
11	盛岡市社会福祉事業団	事務局長	川 村 一 男	
12	岩手県学童保育連絡協議会	会長	八重樫　健	
13	岩手県社会福祉協議会　児童館部会	紫波ブロック幹事	藤 原 隆 聖	

第9回全国児童館・児童クラブ岩手大会　企画運営委員会委員

No.	所　属	役　職	氏　名	担当分科会
1	本宮学童保育クラブ	指導員	橋 本 有 紀 ※	第1分科会
2	岩手県学童保育連絡協議会	事務局	伊吹山 恵理子	
3	岩手県保健福祉部児童家庭課健全育成担当	主事	古 澤 聖 子	
4	盛岡市保健福祉部児童福祉課育成支援係	主任	杉 田 博 信	
5	盛岡市母親クラブ連絡協議会	会長	鎌 田 正 子 ※	第2分科会
6	盛岡市母親クラブ連絡協議会	副会長	関 村 和 絵	
7	盛岡市母親クラブ連絡協議会	理事	西 山 麻由美	
8	種市放課後児童クラブ　どりーむキャンパス	指導者	下 田 定 子 ※	第3分科会
9	奥州市水沢青少年育成市民会議	主任事務局員	大 村 千 恵	
10	みどりの子ども会	世話人	高 谷 淳 子	
11	奥中山学園	園長	佐 藤 真 名 ※	第4分科会
12	大野児童館	児童厚生員	田 中 多美子	
13	山王児童センター	児童厚生員	駒 井 えり子	
14	川目児童センター	児童厚生員	佐々木いずみ	
15	不動児童館	主任児童厚生員	佐 藤 裕規子 ※	第5分科会 あそびにコンビニ あそびのレシピ
16	松園児童センター	児童厚生員	豊 島 まり子	
17	岩手県立大学社会福祉学部	ボランティアサークルあいもり代表	千 原　愛	
18	とうわ子ども未来館	児童厚生員	門 馬 経一	
19	上田児童センター	児童厚生員	吉 田 ヨシ子	
20	城西児童センター	児童厚生員	有 村 里 江	
21	加賀野児童センター	児童厚生員	中 村 寿 子	
22	日本グットトイ委員会岩手支部	会員	若 林 みどり	
23	北松園児童センター	児童厚生員	伊 藤 沙耶香	
24	盛岡市レクリエーション協会	会員	平 野 光 子	
25	日本グットトイ委員会岩手支部	会員	細 川 俊 子	
26	北上南学童保育所たけのこクラブ	指導員	星　絹 子 ※	第6分科会
27	北厨川児童センター	児童厚生員	三 浦 智 恵	
28	花巻市矢沢第一学童クラブ	指導員	佐 藤 千 秋	
29	上米内児童センター	児童厚生員	宮 城 房 子	
30	NPO法人　未来図書館	主任コーディネーター	恒 川 かおり ※	第7分科会
31	ガールスカウト日本連盟岩手県支部	支部長	平 井 ふみ子	
32	CAP岩手	代表	高 橋 寿美子	
34	岩手県社協児童館部会	部会長　（※実行委員長）	吉 成 信 夫	第8分科会
33	盛岡大学短期大学部幼児教育科	教授	斎 藤　修 ※	
35	NPO法人　矢巾ゆりかご	理事長	阿 部 智衛子	
36	宮守児童館	副主任あそびの指導員	吉 田 敏 明 ※	第9分科会
37	盛岡市社会福祉事業団総務課	主任	横 欠 真 人	
38	盛岡生活文化研究室	世話人	大 森 紀代美	
39	盛岡市母親クラブ連絡協議会	副会長	荒 川 加代子	
40	仁王児童センター（岩手県社会福祉協議会児童館部会）	児童厚生員（副部会長）	南 雲 祥 子	運営全般
41	見前児童センター	児童厚生員	一 戸 幸 子	
42	岩手県立児童館　いわて子どもの森	主事	岩 舘 伸 悟	
43	岩手県立児童館　いわて子どもの森	チーフプレーリーダー	長 崎 由 紀	

※印は分科会リーダーです。

その他、たくさんの運営協力委員のみなさんや、県立大学、盛岡大学短期大学部、専門学校盛岡カレッジオブビジネス、岩手女子高等学校ＪＲＣ部の学生さんのみなさんのお力をお借りしました。　ありがとうございました。

開催要項

第9回＊全国児童館・児童クラブ岩手大会

子どもに関わるオトナはみんな集まれ！

～みんなでつなぐ、しなやかで丈夫なネットワークをつくろう～

主催●全国児童厚生員研究協議会、岩手県社会福祉協議会児童館部会
岩手県立児童館いわて子どもの森、財団法人 児童健全育成推進財団

共催●岩手県、盛岡市

第9回　全国児童館・児童クラブ岩手大会　開催要項

テーマ：　子どもに関わるオトナはみんな集まれ！

～みんなでつなぐ、しなやかで丈夫なネットワークをつくろう～

日　　時　平成２１年１０月１７日（土）～１８日（日）

開催場所　●会場：いわて県民情報交流センター「アイーナ」（７階アイーナホール他）
　〒020-0045　盛岡市盛岡駅西通１丁目７番１号　　電話０１９－６０６－１７１７

　●交流会場：ホテルメトロポリタン盛岡本館
　〒020-0034　盛岡市盛岡駅前通１番４４号　　電話０１９－６２５－１２１１

　●あそびにコンビニ会場：盛岡駅前広場「滝の広場」

開催趣旨　子どもを取り巻く地域や家庭のあり方が大きく変わりつつある今日、私たちは子育ち支援（児童健全育成）、子育て支援に関わる地域の拠点的施設である児童館、放課後児童クラブのあり方を見直すことが必要であると考えます。

　この全国大会開催を契機として、放課後の児童及び保護者に関わる様々な団体、施設職員の方々とともに、地域の子育ち・子育て支援を進めるための具体的な方策を見出すと共に、地域を生かした多様な関係機関・ひとをつなぎあうネットワークを構築し、児童虐待の未然防止を含めた、子育て環境づくりのコア施設としての役割や機能について学びあいます。

主　　催　全国児童厚生員研究協議会　／　岩手県社会福祉協議会児童館部会
　岩手県立児童館いわて子どもの森　／　（財）児童健全育成推進財団

共　　催　岩手県、盛岡市

主　　管　第９回全国児童館・児童クラブ岩手大会実行委員会

後　　援　厚生労働省、（財）こども未来財団、（社福）全国社会福祉協議会、（財）児童育成協会
　全国地域活動連絡協議会、民間児童館ネットワーク、北海道･東北７県児童館連絡協議会
　（社福）盛岡市社会福祉協議会、（社福）盛岡市社会福祉事業団
　岩手県学童保育連絡協議会、盛岡市母親クラブ連絡協議会

協　　力　（株）林風舎、ＪＲ東日本 盛岡駅
　岩手県立大学社会福祉学部、盛岡大学短期大学部幼児教育学科
　専門学校 盛岡カレッジ オブ ビジネス、岩手女子高等学校ＪＲＣ部

◇◆

プレイベント「あそびにコンビニ」

～児童館・児童クラブ等のスタッフが楽しい遊びや手作りおもちゃを紹介します。子どもも大人も大集合！～

期　日：平成２１年１０月１７日(土)　１０：３０～１４：００

会　場：盛岡駅前広場「滝の広場」

参加費：無料　～子ども、大人問わずどなたでも参加できます。親子での参加大歓迎！～

1日目：10月17日（土）

(1)開会式（12：45～13：15）

(2)オープニングパフォーマンス（13：15～13：45）

★宮澤賢治の世界と音楽のコラボレーション

出演：俳優 竹下景子さん他

(3)トークセッション（13：45～16：10）

これからの児童館・児童クラブに不可欠なものは何なのだろう。子育ち、子どもの主体性を育む場として必要な機能について、近接領域で活躍するキーパーソンたちとともに議論を深めたい。

テーマ：「子どもに関わる施設は変わる！児童館・児童クラブは変えられる！～地域のコア施設としての新たな役割とは～」

パネリスト（子どもに関わる各分野のスペシャリストのみなさん）

- ●竹下　景子さん（俳優）
- ●天野　秀昭さん（NPO法人 日本冒険遊び場づくり協会 副代表）
- ●大村　千恵さん（奥州市水沢青少年育成市民会議 主任事務局員）
- ●奥山千鶴子さん（NPO法人びーのびーの 理事長）
- ●寺田　陽子さん（財団法人 札幌市青少年女性活動協会 こども事業部長）

司会　いわて子どもの森 館長　吉成　信夫

(4)現場からのメッセージ（16：25～17：30）

- ●森本　　扶さん（埼玉大学・国士舘大学講師、児童健全育成推進財団「児童館のあり方研究会」研究員）
- ●波多野里美さん（ももやま児童館　館長：京都市）
- ●細川　由子さん（矢巾町立煙山児童館　主任児童厚生員：岩手県）

(5)交流会（18：30～20：30）

会場　ホテルメトロポリタン盛岡本館

会費　5,000円

竹下景子さん（俳優）

愛知県名古屋市出身。1973年、NHK『波の塔』でデビュー。映画『男はつらいよ』のマドンナ役を3度務め、『学校』では第17回日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。テレビ・映画・舞台への出演の他、「世界の子どもにワクチンを日本委員会」ワクチン大使、国連WFP協会（国連世界食糧計画）顧問、C・C・C富良野自然塾でのインストラクターなど幅広く活動している。

天野秀昭さん

昭和55年開設されたばかりの日本初の民官協働による冒険遊び場『羽根木プレーパーク』で派遣ボランティアとして活動。翌年、住民運動によりプレーパーク初の有給プレーリーダーとなる。平成6年から子どもに関わる団体・個人のネットワーク『世田谷こどもいのちのネットワーク』を進めつつ、平成10年に国内初の18歳までの子ども専用電話、『せたがやチャイルドライン』を開設。子どもが遊ぶことの価値を社会的に高め、普及させ、実践をすすめている。

大村千恵さん

平成4年から水沢市青少年育成市民会議事務局員として数多くの事業を展開。子どもの居場所づくり事業では、全国に先駆けて平成11年に「ホワイトキャンバス」の開設、運営に尽力。親や大人たちは、子どもたちを「どう育てたいのか」という強い信念を持つことの大切さを唱え続け、青少年の健全育成に日々努めている。

奥山千鶴子さん

平成12年、子育て中の親たちで商店街空き店舗を活用した「おやこの広場びーのびーの」を立ち上げる。子育て当事者の力を生かした地元の幼稚園・保育園ガイド作成、子育て応援サイトの運営のみならず、学生からシニア世代まで多様なボランティアに支えられ地域に根ざした幅広い活動を展開中。

寺田陽子さん

札幌市内100館を越える児童会館の指定管理者である同協会に昭和55年に就職。以後、永年にわたり児童会館の現場で活躍。現在、児童会館での行事にはほぼ全館が地域と連携しており、「午後は中高生がサポートスタッフを務め、夜は大学生が中高生の夜間利用を支援」など進んだ交流例も増えている。平成21年4月よりこども事業部長としてさらに活動の幅を広げ活躍中。

2日目：10月18日（日）

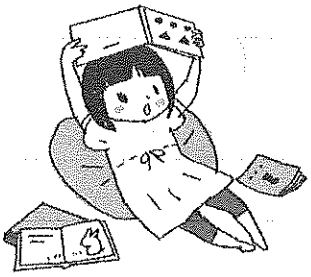
(1) 受付（9：00～9：30）　※分科会ごとの受付となります

(2) 分科会（9：30～12：00）

(3) 閉会セレモニー（12：15～12：45）

託児のご案内

大会開催期間中、託児室を設置いたします。託児室の利用を希望される方は、事前に申し込みが必要となりますので、申込書の所定欄にご記入ください。



分科会

2日目 10月18日(日)
受　付　9:00~9:30
分科会　9:30~12:00
※各分科会場での受付となります。

プレ大会ワークショップでのひとコマ

「児童館・放課後児童クラブスタッフの情報交換」
～放課後の子どもを真ん中にみんな集まれ～!～

第1分科会
【語り場】

「児童館・児童クラブでどんなことをして過ごしているの？」「こんな時はどうしてる？」「まだ職員になりたてで分からないの…」など、現場の事を分かり合えるよう話をしましょう。放課後の子どもを真ん中に、集まった私たちが手をつないでいけるような分科会にしたいです！

「子どもの姿になにをキャッチ!?その心に寄り添える大人に」

第2分科会
【子育て支援・親支援】

子育ての不安や悩みは当たり前。子どもを育てることは地域の未来をつくる大事な仕事です！！参加者の皆様、それぞれの立場で子どもの姿から感じる不安、悩みなど、どんどん出し合って大人としてのあり方を一緒に語ってみませんか？

「中高生の居場所はどこに?!児童館（地域）の可能性を探る」
～『思春期』真っ只中の若者たちと本音でしゃべり場!～

第3分科会
【中高生の居場所】

命のはかなさ、人間の弱さを感じる青少年事件が多発しています。幼児期の育成のひずみが、思春期に噴出するのでしょうか。現代の子どもたちの問題点が何かを考えたとき、「自己中心的、他者との関係がつくれない、打たれ弱い」という三点が浮き彫りになりました。また、一見しただけではわからない複雑怪奇な心の闇を抱える少年少女も増えつつあります。こうした課題を抱える子どもたちに共通した人間像は、孤独で孤立しているということ。ここに着目し、"一人ぼっちをつくらない運動"を展開するコア施設としての児童館（地域）のあり方や可能性を探りましょう。

「発達障がいについて、聞こう、学ぼう、感じよう!」

第4分科会
【発達障がい】

発達障がいと診断を受けている子ども、診断はされなくても「しつけ」や「環境」だけでは説明できないようなコミュニケーションや人間関係、ルールを守ること等が難しい子どもたちが身近にいませんか。そんな彼らの世界を関わる私たちが理解しようとすることで新たな関わりの糸口がつかめる場合があるように思います。長年発達障がいの方々と関わってきたゲストをお迎えし、彼らの世界の模擬体験なども交えながら、共に語り合いましょう。

「あそびで発見!子どもの力・あそびで発信!児童館・児童クラブの魅力」
～みんなで育てよう「遊びの力」～

第5分科会

【遊び企画】

「子どもが主人公になれる遊びや行事をどのように創っていったらいいの?」
学年を越えて、たくさんの子どもたちが一緒に楽しめる遊びや行事。やらせじゃなくて、子どもたちがいっちょまえに考え、決めて、行動する。そんな風にしていきたいんだけどみんなはどうしているのかなぁ…?

子どもたちが生き生きと活動できる行事や遊びのヒントをみんなで探ってみませんか?全国の子どもたちの笑い声がいっぱいの「うちのいちおしあそび&行事」が盛岡に大集合。

児童館・児童クラブに、新しい風が吹きますように!

「気づこう!子どもの思い、語り合おう!私たちにできること」
～気づけば 子どもってこんなにステキ!～

第6分科会

【子どもとの対応】

子どもたちが子ども同士の関係をつなぎ合い、日常の中で頻発するケンカやトラブルなどの課題を、生活を通じて乗りこえていく力を身につけていくために、私たち職員が気づき、できることは何か。子どもたちと共感を伝えあえる関係を築くために、子どもとの日々の対応について本音で語り合いましょう!

「地域で育てる大きな未来」～自分を認められる子どもと大人でいるために～

第7分科会

【虐待防止】

児童虐待や大人の自殺、子どもが犠牲となる痛ましい事件などの背景には一体何があるのでしょう?

虐待や事件が誰にでも起こりうることだとしたら……。この分科会では専門の先生からお話しを伺い、一人の子どもをたくさんの大人が心配できる地域であるために、孤独な大人の心に寄り添える地域であるために、私たちにできることや大人も子どもも自分を好きでいられる心のあり方を参加者の皆様と一緒に考えたいと思います。気軽にお話ししませんか?

「ここがツボ!児童館マネジメントを良くする方法を求めて」

第8分科会

【児童館マネジメント】

指定管理者制度ってどう対応すればいいの?行政とどういう関係を取ればいいの?地域の人との関係は?など。夢も希望も意地もあるけれど、個人のがんばりだけでは越えられない。どうも館全体としてうまく整理できていない…。自治体担当者、児童館館長、研究者も、今ある児童館マネジメントを良くするツボをみんなで一緒に考えてみましょう。

「なべての悩みをたきぎと燃やし……(宮澤賢治　農民芸術概論綱要)」

「子どもの安全・安心とリスクマネジメント」
～ひとが創りあう安全、ひとが育む安心～

第9分科会

【リスクマネジメント】

子どもたちと過ごす日常で、一番の心配は事故や怪我。安全責任が厳しく問われる現代社会で、元気いっぱいのたくさんの子どもたちを数人の職員で見ていかなければならない現実。既存の建物はとても理想的とは言えないけれど、アイディアと愛情であたたかい空間を創りだしたい!そのためには、子どもたちを送り出す親と迎え入れる施設スタッフが共に語り合い、支えあう必要があります。たくさんのご参加をお待ちしております!

大会後、最後にみんなで撮影した集合写真。満足笑顔です！
（だけど‥‥、都合で全員そろっていないのが残念(*_*;　）

次回は、第１０回全国児童館・児童クラブびわ湖大会 です。
平成２２年１１月２０日（土）～２１日（日）
みなさん、滋賀でお会いしましょう！

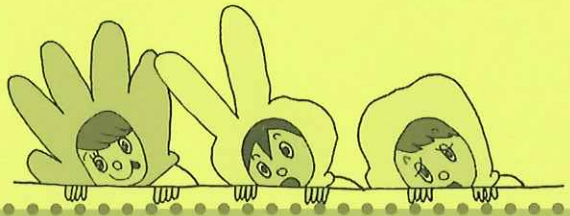
お　知　ら　せ

岩手大会でうまれたこのつながりを大事にしていこう、ということで、
岩手県では、平成２２年度に県立児童館いわて子どもの森（一戸町）にて
『いわての児童館・放課後児童クラブ等　交流大会』を開催する予定です。
児童館の職員に限らず子どもに関わるお仕事をしている皆さん、ぜひお集まりください。

県立児童館いわて子どもの森
〒０２８－５１３４　岩手県二戸郡一戸町奥中山字西田子１４６８－２
ＴＥＬ：０１９５－３５－３８８８　ＦＡＸ：０１９５－３５－３８８９

ブログ、継続決定！

岩手大会が終わっても、大会ブログは続きます。
児童館での行事や普段の様子を、みなさんに紹介してみませんか？
また日頃の悩みを、みなさんと語り合ってみませんか？
みなさんの語り合いの場になればと願っています。
どうぞ、覗いてみてください。そして、書き込みもお願いします！
URL: http://www.iwate-shakyo.or.jp/jido
※詳しくは、岩手県社会福祉協議会 児童館部会にお問い合わせください。



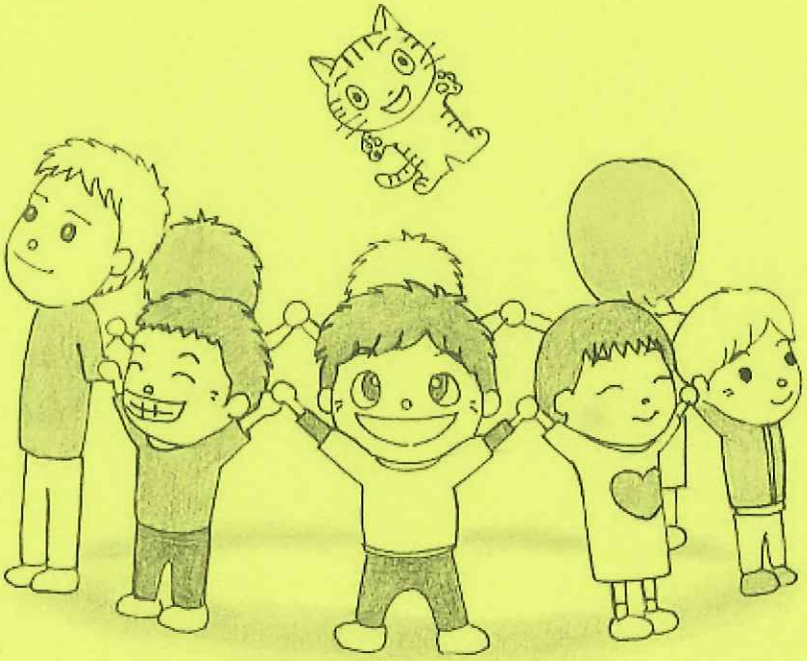
協賛いただきました企業・団体の皆様
ご協力誠にありがとうございました

・銀河離宮
・盛岡リフホテル
・花梨
・みちのくコカ・コーラボトリング株式会社
・小成商店
・山口北州印刷株式会社
・高新酒店
・高松義雄太鼓店
・有限会社 加賀野地所
・盛岡英数進学会
・花工房らら倶楽部
・矢巾町つちはしグリーンツーリズム
・オクムラ株式会社
・日本タッパーウェア株式会社
・有限会社 佐々木教材社
・和のくらし「小袖」
・だんごと駄菓子 三盛堂
・ローソン盛岡駅前店
・ＢＨレンタリース盛岡
・身体障害者入所授産施設 新生園
・おはなしグループ ブレーメン
・Ｂａｂｙ Ｓｈｏｗｅｒ
・川村内科医院
・藤原養蜂場
・おおのパン工房
・株式会社 サンワールド
・ＪＴＢ東北 盛岡支店
・赤坂病院
・小料理つがる
・志百家
・株式会社 平金商店
・株式会社 メディアクルー
・機屋
・株式会社 エルク 盛岡営業所
・ＩＧＲいわて銀河鉄道株式会社
・有限会社 安比まいたけ
・三本木工芸
・株式会社 ニホン・ミック
・奥中山高原温泉

（順不同　敬省略）

第9回全国児童館・児童クラブ岩手大会 報告書

平成２２年３月　発行

《編集・発行》
第9回全国児童館・児童クラブ岩手大会 事務局

《お問い合わせ》
社会福祉法人 岩手県社会福祉協議会 児童館部会
〒020-0831
岩手県盛岡市三本柳８－１－３　ふれあいランド岩手内
TEL:019-637-4407　　FAX:019-637-4255